

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第367集

那珂遺跡12

—那珂遺跡群第40次調査の報告—

1994

福岡市教育委員会

那珂遺跡12

—那珂遺跡群第40次調査の報告—



遺跡略号NAK

1994

福岡市教育委員会

序

福岡市のはば中央部にある那珂台地には、三角縁神獣鏡を出土した那珂八幡古墳をはじめ、多くの文化遺産が分布しています。

また博多駅に近いという土地柄から、近年都市の整備が著しく進み、開発事業が盛んに行われている地域もあります。

福岡市では、これらの開発工事により消滅する文化遺産については、発掘調査を行い、記録保存に努めているところであります。

このたび、博多区の那珂2丁目地内において倉庫付事務所建設の為に発掘調査を行い、弥生時代中期末頃の貯蔵穴や弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居址・据立柱建物、中世末戦国時代の濠跡などの貴重な生活遺構・遺物が出土しました。

本書は、これらの発掘調査の成果を報告するものです。本書が今後、埋蔵文化財保護に対する認識と理解、さらには学術研究上お役に立つことが出来れば、幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際し、地権者の伊藤フミ氏、施工業者である日視建設の方々をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表す次第であります。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が1993年2月8日から4月13日にかけて発掘調査を実施した倉庫付事務所建設に伴う、那珂遺跡群の第40次緊急発掘調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、堅穴住居址→S C、振立柱建物→S B、井戸址→S E、土坑→S K、貯蔵穴→S U、溝→S D、ピット→S P、その他の遺構→S Xとした。遺構番号はピットを除いて通し番号とし、番号の頭にそれぞれの遺構の性格を示す遺構記号を付した。
3. 本書に掲載する遺構・遺物の実測・清書は調査担当の山崎の他、瀬戸啓治、井上加代子、加藤周子、峰須賀博子、赤星攝、内野亜香が中心になって行った。
4. 本書掲載の遺構及び遺物写真は山崎が撮影を行った。
5. 本書で用いた方位は磁北である。
6. 本書掲載の遺物及び記録類は、保存と公開普及活用を図るために、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
7. 本書の執筆・編集は加藤・内野の協力を得て山崎が行った。

遺跡調査番号	9256		遺跡略号	NAK	
調査地地籍	福岡市博多区那珂2丁目5		分布地図番号	023-A-1	
申請面積	545.23m ²	調査対象面積	460m ²	調査実施面積	496m ²
調査期間	1993年2月8日～4月13日		事前調査番号	4-2-264	

本文目次

	頁
I.はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査の組織.....	1
II. 遺跡の立地と歴史的環境.....	3
III. 調査の記録.....	5
1. 調査の概要.....	5
2. 積穴住居址.....	5
3. 挖立柱建物.....	13
4. 土坑.....	18
5. 土塚墓.....	19
6. 貯藏穴.....	22
7. 溝状遺構.....	23
8. その他の遺構.....	32
9. ピット及び搅乱・遺構面出土遺物.....	33
IV.まとめ.....	37

図版目次

PL. 1	(1)調査区全景（北から） (2)調査区反転後全景（北から）	PL. 8	(2)SU26（西から） (1)SD28（南から）
PL. 2	(1)SC05（東から） (2)SC04（東から）		(2)SD28土層（北から） (3)SD01・02（北から）
PL. 3	(1)SC15・16（北東から） (2)SC15・16完掘後（北西から）	PL. 9	(4)SX21（東から） (1)SK14（東から）
PL. 4	(1)SC12（北東から） (2)SC29（南から）		(2)SP335（北東から） (3)SX30（北から）
PL. 5	(1)SB22-24（北から） (2)SB23・24・31（北から）	PL. 10	SC04・05・12・15・16、SB24出土遺物
PL. 6	(1)SB34（南東から） (2)SK03（北から）	PL. 11	SK03・14・17・26、SX25出土遺物
PL. 7	(1)SK17（東から）	PL. 12	SD01・28出土遺物
		PL. 13	SD28・ピット出土遺物

挿 図 目 次

本文頁

Fig. 1	周辺道路分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2	那珂第40次調査区位置図 (1/7,000)	4
Fig. 3	第40次調査区遺構配置図 (1/200)	6
Fig. 4	SC04・05・12 (1/60)	8
Fig. 5	SC04・05・12出土遺物 (1/3・1/4)	9
Fig. 6	SC15・16 (1/60)	10
Fig. 7	SC04出土遺物 (1/3)	11
Fig. 8	SC15・16出土遺物 (1/3・1/4)	12
Fig. 9	SC29 (1/60)	13
Fig. 10	SB22・23 (1/80)	15
Fig. 11	SB24・31-33 (1/80)	16
Fig. 12	SB24 (1/80)	17
Fig. 13	SB24・33・34出土遺物 (1/4)	18
Fig. 14	SK03 (1/40)	20
Fig. 15	SK14・17-35, SU26 (1/30)	21
Fig. 16	SK03・14・19, SX21・25 (1/4)	22
Fig. 17	SK17出土遺物 (1/3・1/4)	23
Fig. 18	SU26出土遺物 1 (1/4)	24
Fig. 19	SU26出土遺物 2 (1/3・1/4)	25
Fig. 20	SK06・20 (1/40)	26
Fig. 21	SD01・02・11・28土層 (1/40)	27
Fig. 22	SD01・02出土遺物 (1/4)	29
Fig. 23	SD28出土遺物 1 (1/4)	30
Fig. 24	SD28出土遺物 2 (1/3・1/4)	32
Fig. 25	SX21・25, SP335 (1/20)	33
Fig. 26	SP335出土遺物 (1/4)	34
Fig. 27	SX30 (1/60)	35
Fig. 28	ピット出土遺物 1 (1/4)	36
Fig. 29	ピット出土遺物 2 (1/3)	37
Fig. 30	遺構面・表土出土遺物 (1/4)	38

I はじめに

1. 調査に至る経過

1992年10月21日付で地権者の伊藤フミ氏より、博多区那珂2丁目5番地内に倉庫付事務所建設の為の埋蔵文化財の事前調査願が教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、申請地が那珂遺跡群内にあり、周辺隣接地では過去発掘調査が行われている事から、事前に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵の有無を確認する事とした。試掘調査は同年11月10日と12月8日の2日間を行い、各試掘トレンチから円形のピットと古墳時代の堅穴住居址、溝らしきものを確認し、申請地内には古墳時代を中心とする遺構が全般に広がる事が予想された。この試掘結果を受けて、埋蔵文化財課は申請者と遺跡の取り扱いについて協議をかさねたが、現状保存は難しい状況であるという事から、建築工事で失われる遺構については、発掘調査で記録保存を行うという事となった。発掘調査は1993年2月8日から4月13日迄実施し、その後ひきつづき平成5年度事業として、報告書作成作業を行った。

2. 調査の組織

調査委託：伊藤フミ

調査主体：福岡市教育委員会

調査統括：埋蔵文化財課課長 折尾学

埋蔵文化財第2係長 塩尾勝利（前） 山崎純男（現）

調査庶務：吉田麻由美

調査担当：試掘調査担当 横山邦雄 荒牧宏行

発掘調査担当 主任文化財主事 山崎龍雄

整理補助：井上加代子 加藤周子 峰峰賀博子

調査作業・整理作業：瀬戸啓治 村山市次 広田安平 上野龍夫 徳永静雄 大長正弘

堀川ヒロ子 野口ミヨ 永松伊都子 中村フミ子 西本スミ 日比野典子 石川洋

子 森山キヨ子 武田潤子 澄川アキヨ 藤野信子 浦山初栄 岩下郁子 大賀順

子 釘崎由美 坂木智子 田口美智子 赤星攝 有吉千栄子 池田礼子 内野亜香

吉良山益美 武田祐子 手銭恭子 松下節子



Fig 1 周辺遺跡分布図(1/25,000)

II 遺跡の立地と歴史的環境(Fig.1・2)

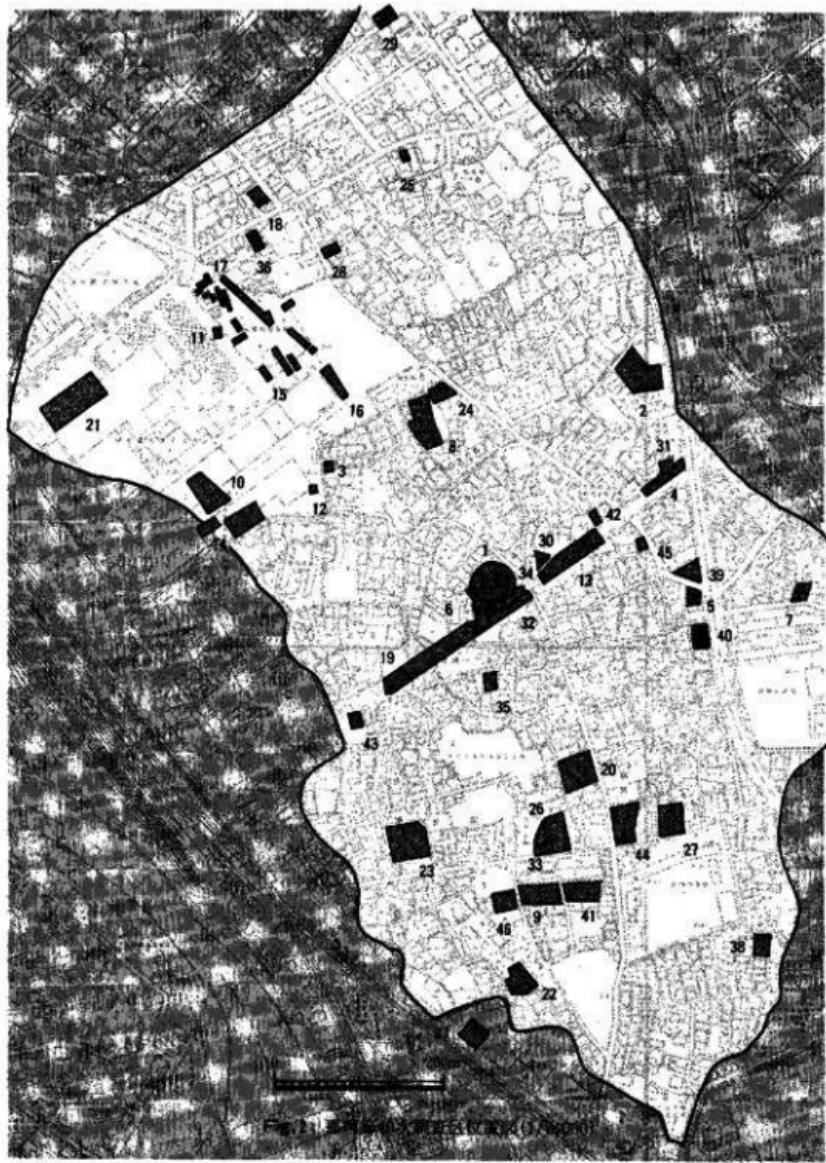
那珂遺跡群が立地する那珂台地は、那珂川と月隈丘陵に挟まれた狭義の福岡平野の南西側に位置する洪積世の低台地であり、その範囲は南北1.5km、東西1kmを測る。この台地は南東側の春日丘陵から次第に高さを減じながら、北西側へ細長く比恵台地迄継続的に続く丘陵である。那珂地区では台地の標高は10~15m前後を測る。この細長く延びる丘陵群は奴国を中心とした地域とも言べき地域であり、旧石器時代から現代に至る迄、連續と生活が営まれた地域であった。

旧石器時代は当地域南側の諸岡丘陵には諸岡遺跡や、南西側の五十川高木遺跡、東側の板付遺跡などでナイフ形石器など旧石器時代終末期の遺物が発見されている。また当遺跡群の第41次地点でも該期の遺物が出土している。

縄文時代の遺跡は少なく、板付遺跡で早期から前期の遺物が、那珂川対岸の野多目遺跡では中期から後期の貯蔵穴群が発見され、晚期終末には板付遺跡では水田址、当遺跡群南側の第39次地点では二重の環濠集落が発見された。また北東側の福岡空港地内の雀居遺跡では夜白式土器の単純層から多量の木製品・土器・石器類が出土している。

弥生時代には当遺跡群を中心に比恵遺跡群や板付遺跡などで大規模な集落が発展する。集落遺跡では板付遺跡に前期初頭の環濠集落が出現し、比恵遺跡群の春住遺跡では前期初頭の貯蔵穴群が発見され、諸岡遺跡では前期後半で豊穣状構から朝鮮系無文土器が発見されている。また下月限丘陵では久保園遺跡や大谷遺跡がある。墳墓遺跡としては下月限丘陵に宝満尾遺跡や金隈遺跡がある。また当遺跡群や比恵遺跡群、板付遺跡では度々の調査で青銅器やその鋳型が多数出土しており、当地一体が青銅器の製造センターであった事が考えられている。低地部には台地の東に那珂深オサ遺跡、更にその東側の那珂久平遺跡や板付遺跡などでは水田址や井堀も見つかっている。

古墳時代以降も各地域に集落が展開するが、中心はやはり那珂台地にあるようで、当台地中央部に三角縁神獣鏡が出土した前期初頭の前方後円墳である那珂八幡古墳があり、その北西側500m程の所には後期の前方後円墳である劍塚古墳がある。また比恵遺跡群内では削平消滅した円墳跡も確認されている。また海岸砂丘部の博多遺跡群にも前方後円墳が築かれるようになり、古墳時代から中世にかけての日本の対外交渉の代表的窓口と発展を遂げていく。また北側の比恵遺跡群では那津官家跡と言われる官衙建物群が検出されている。律令期当地域一帯は那珂郡となるが、その那珂郡衙推定地は日野尚志氏によれば当遺跡の東側御笠川と諸岡川に挟まれた大字那珂字君体の地に求めている。また板付遺跡の南側の高畠遺跡では奈良時代の寺院址の存在が予想され、那珂郡の郡寺があった可能性が強い。



III 調査の記録

1. 調査の概要

那珂第40次調査区は南東から北西に細長く延びる洪積世の台地である那珂丘陵の東側に立地しており、標高は約9mを測る。現況は宅地であった。

調査は重機による表土除去作業から始め、堆土については申請者の協力を得て、場外へ持ち出し、発掘調査を開始した。

遺構面は20~40cmの表土下の橙色の鳥栖ローム土上面で検出した。遺物包含層はなかった。遺構面は西側から東側へ程やかに傾斜している。遺構の残りは北東側がやや削平を受け余り良くないが、西側は比較的良好であった。

検出した遺構は竪穴式住居址6棟、掘立柱建物7棟、土坑6基、貯藏穴1基、木棺墓1基、溝状遺構4条、濠1条などである。遺構の時期は弥生時代中期末から中世迄の長期に亘る。遺物はそれぞれの遺構から弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器がコンテナ総数25箱出土している。量的には弥生土器が圧倒的に多い。

2. 竪穴住居址

SC04 (Fig. 4, PL. 2)

調査区西壁中央部境界地にかかる住居址である。近代井戸とSB24に切られ、また境界地にかかるため全体規模はわからないが、方形或いは長方形を呈す住居址であろう。確認規模は東西長2.1m以上、南北長3.3mを測り、壁高は約10cmと残りは余り良くない。床面は中央部がやや深くなる。埋土は黒褐色土で地山ロームブロックが多く含んでいた。炉址や主柱穴は調査範囲内では確認出来なかった。

出土遺物 (Fig. 5~7, PL. 10) 弥生土器片と思われる土器片が出土しているが、量的に少なく、また図示出来るものも少ない。

1は弥生土器の甕口縁部1/6片。復元口径30.6cmを測る。逆L字形を呈す口縁である。器壁は全体に剥落磨滅し調整は不明。色調は橙色で、胎土に径2mm位の砂粒と赤色粒子を含む。12は砥石か台石。長径14.4cm、短径13.1cm、厚さ4.4cmを測る。石質は灰褐色の粒子が粗い砂岩で、上面に使用による擦痕が残る。砥石とすれば荒砥であろうか。

SC05 (Fig. 4, PL. 2)

調査北西隅で検出した住居址である。全体の2/3が境界地外で、規模は不明である。南側に屋内土坑SKI8を持ち、北壁近くに0.9×0.65mを測る平面形が橢円形を呈す、すり鉢状の炉址

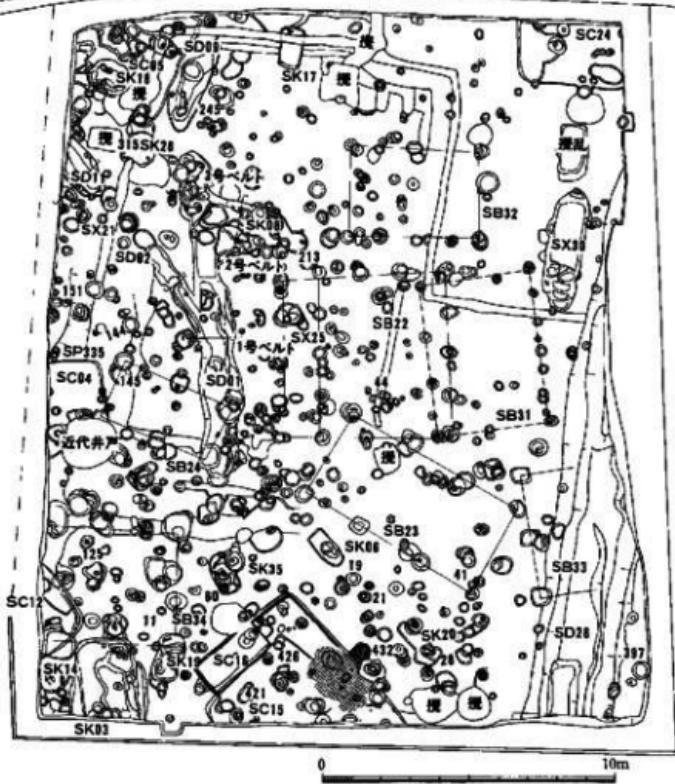


Fig. 3 第40次調査区追跡配置図(1/200)

があり、その炉から1.5m東側に主柱のSP305がある。このSP305は南壁から2.5m程離れており、炉址とSP305を結ぶ線を中心線として反転復元すれば、規模は5m程となり、調査区での確認した規模の幅3.9mより大きくなる。以上の事から東側に並行する幅1m程の浅い溝状の落込みSD09があるが、これをベッド状造構の名残と考えれば、東西北壁にベッド状造構がコ字状に巡る住居址となり、その確認規模は東西長軸長4.9m以上、南北短軸長4.1m以上を測り、炉址を中心に反転復元すれば、長軸長約6.9~7.0m、短軸長5.1m程となる。主柱穴は前述した通り2本柱である。床面は地山ローム粘土で貼床されており、床面はやや汚れている。貼床面を撤去すると床面は溝状に落ち込む。周壁溝は確認出来なかった。屋内土坑SK18は平面形が梢円形を呈し、長径1.55m、短径1.15m、深さ約30cmを測り、北壁中央に直径15cmほどの小ピット状の落込みがあり、これが梯子をかけた跡で入口となるのかも知れない。

出土遺物 (Fig. 5, PL. 10) 弥生土器から古墳時代の土師器・須恵器が出土している。細片が多く量的にはそれ程多くない。須恵器は上層からの出土で流入品である。屋内土坑SK18から完形に近い弥生後期末頃の土器が出土している。

2は上層出土。弥生土器の複合口縁部1/4片で、復元口径26cmを測る。内外面ナデで、頭部外面に細かいタテ刷毛が残る。外面色調はにぶい褐色で、径5mm未満の砂粒を多く含む。3はSK18出土。鉢の1/2片で復元口径23.4cmを測る。縁状の幅広い口縁部が付き、底部が尖り気味の丸底を呈すもの。色調は淡橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。焼成はやや不良。4は高杯脚部片。脚部内面にはしづら痕が残り、器表は磨滅が著しい。色調は浅黄橙色を呈し、細砂粒・赤色粒子を含む。5は甕または鉢の小片。外面刷毛、内面ナデで、色調は浅黄橙色を呈し黒斑がある。胎土は径3mm以内の砂粒を含む。6・7はSK18出土の筒状の器台で、口縁直下が締まり外折する形態。6は脚部を欠失し、7はほぼ完形である。法量は6が口径15.5cm、7が15.8cmを測る。いずれも外面タテ刷毛、内面は指おさえ痕が残る。色調はいずれもにぶい橙色で、細砂を多く含む。8はSK18出土の杓子形土製品。長さ9.2cm、幅8.0cmを測る。やや磨滅するが柄部は指おさえ、柄内面はナデである。色調は橙色で、胎土に細砂・赤色粒子を含む。

SC12 (Fig. 4, PL. 4)

SC04の南側、大部分が境界地外にかかり、コーナ部分のみを検出した。確認規模は長辺1.6m以上、短辺1.1m以上、残存壁高20cm前後を測る。埋土は黒褐色粘質土を主体とし、地山ロームブロックを少量含むが、生活排水の汚染によって下層程暗青灰色に変化し、底面も明確に把握出来なかった。壁下には周溝が巡るが汚染の為全体は確認出来なかった。また主柱は確認出来なかった。

出土遺物 (Fig. 5, PL. 10) 古墳時代の土師器片を中心とする遺物が少量出土している。

9・10は土師器である。9は楕形の完形の手捏ねの鉢、口径9.0cm、器高3.0cmを測る。磨滅が著しいが指おさえ仕上である。色調は淡褐色を呈し、胎土に粗砂・雲母片を多く含む。10は

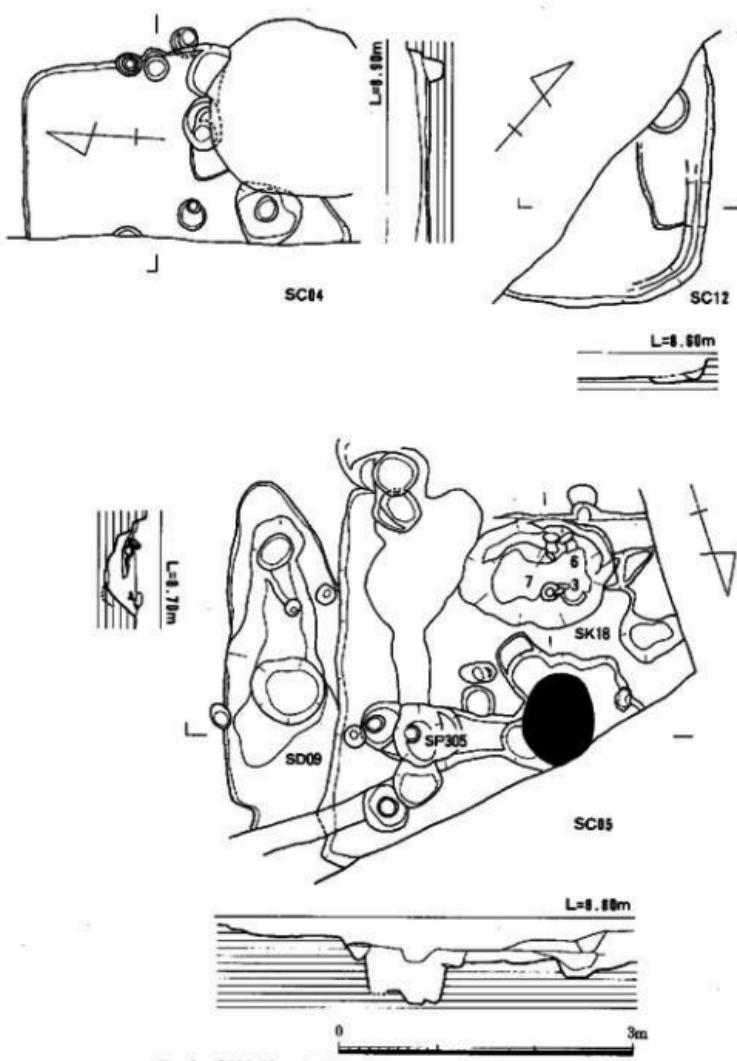


Fig.4 SC04-05-I2 (1/60)

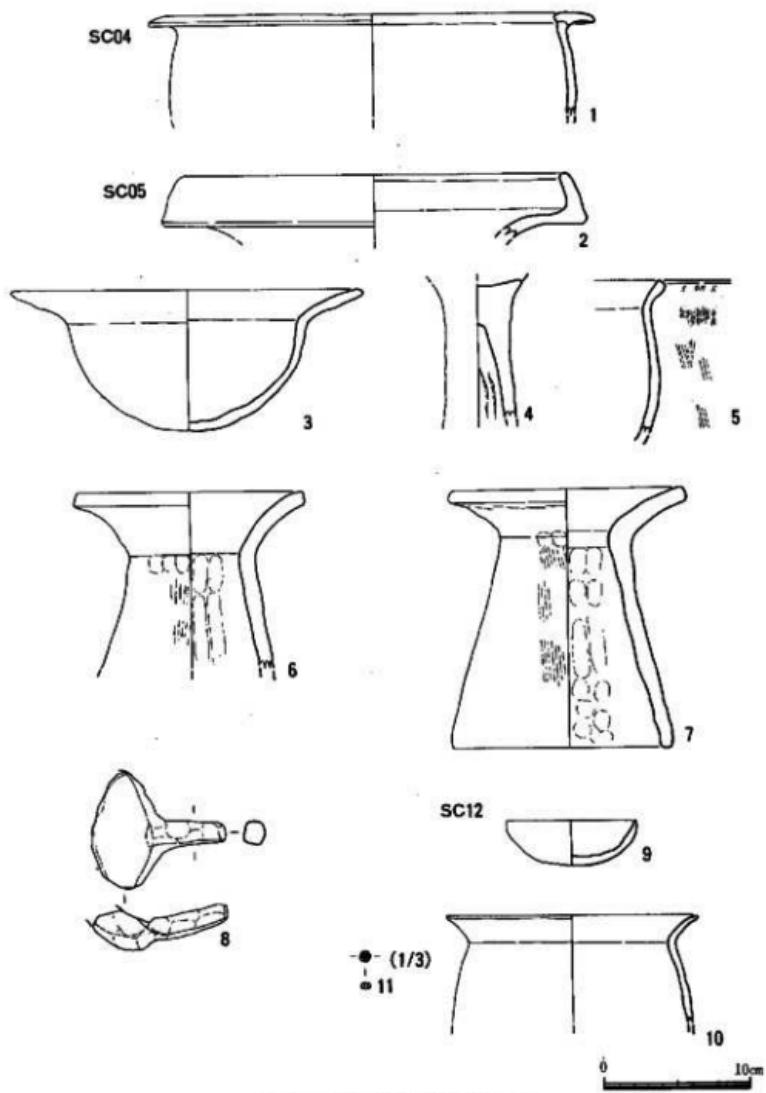


Fig. 5 SC04-05-I2出土遺物(1/3・1/4)

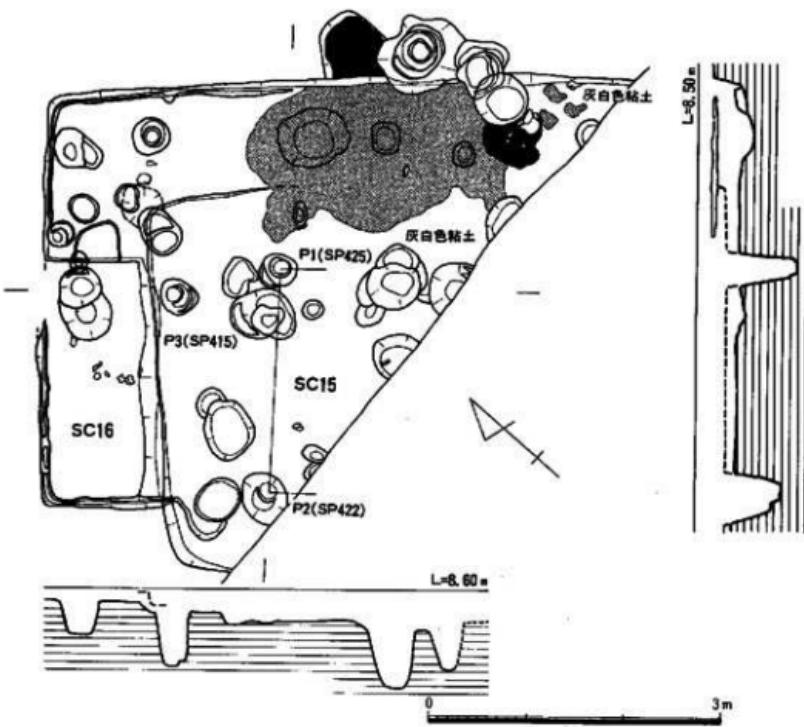


Fig. 6 SC15-16 (1/60)

變でく字状を呈す口縁部小片で、復元口径17.3cmを測る。器壁は荒れるが、外面平行叩き痕がかすかに残る。色調は浅黄橙色を呈し、胎土に径3mm以下の砂粒を多く含む。IIはガラス小玉で、床面出土。色調はコバルトブルーで、直径5mm、器高3mm、孔径2mmを測る。

SC15 (Fig. 6 · PL. 3)

調査区南側境界地で検出したSC16と住居址を切る方形の竪穴住居址である。一部は調査区外である。4本主柱の方形住居址と考えられ、その規模は東西長で4mを測る。主柱はP1 (SP425)、P2 (SP422) が相当する。床面は貼床されている。周壁溝は確認出来なかった。また竪穴は住居址確認範囲内では確認出来なかった。

出土遺物 (Fig. 8, PL. 10) 弥生土器をはじめ、古墳時代の土師器・須恵器片が多量出土している。古墳時代前期初頭のSC16と切りあっている為に前期の遺物が混入している。

13～20は須恵器。13・14は坏蓋・13は口縁部小片、14は1/8片で、復元口径はそれぞれ14.0cm、11.4cmを測る。内外面ナデ、色調は13が黒灰色、14は灰色で胎土にいずれも細砂粒・黒色粒子を含む。15～17は坏身。15は1/6片で復元口径11.9cm、16は1/3片で復元口径10.4cmを測る。17は口縁部小片で復元で10cmを測る。内外面ナデ。色調は15が灰白色、16が灰色、17はやや青味がかった灰色を呈す。胎土はいずれも細砂粒を含む。18・19は有蓋高坏の坏部片。18は1/4片、19は1/3片で、復元口径は13.0cm、10.6cmを測る。色調は外底部がヘラ削りの外はナデ。外面色調は18が灰色、19が青灰色を呈す。胎土は18が1mm内の細砂粒を含む。20は床面出土の脚部片。復元底径は13.0cmを測る。外面自然釉がかかり、黒灰色を呈す。21～25は土師器。21は高坏脚部片。全体に磨滅が著しく調整不明。色調は橙色で、胎土に2mm内の砂粒・雲母・赤色粒子を含む。22は瓶の口縁部小片。SC16東側の灰白色粘土上近くで検出した。全体に磨滅が著しいが、外面刷毛が残り、内面はヨコ刷毛とヘラ削り。色調は黄橙色で胎土に径3mm内の砂粒を含む。23～25は甕。23は口縁部1/8片で、復元口径19.7cmを測る。外反気味に軽く開く口縁部で、刷毛が少し残る。色調は橙色で、胎土に径3mm内の砂粒を多く含む。24は甕の底部1/4片。外面刷毛で叩きがわずかに残る。内面削りで、内底は指おさえ痕が残る。外面色調はにぶい赤褐色、胎土は径4mm内の粗砂粒を多く含む。25は胴部1/8片。外面タテ刷毛が残り、内面ヘラ削りのちナデ。色調は淡橙色で、胎土は径5mm内の粗砂粒・雲母片を多く含む。焼成は良い。33は黒曜石の石鎧で、三角形を呈す。

長さ1.7cm、幅1.6cmを測る。

SC16 (Fig. 6, PL. 3)

SC15に切られる長方形の住居址で、南側は南壁境界地にかかる。確認規模は南北長6m以上、東西長4.4mを測る。北壁側2/3程に幅1m程のベッド状遺構がある。このベッドの上面は汚れていた。また東壁中央部沿いに長径3m、短径1.5m程の範囲で上層に灰白色粘土が薄く分布していた。主柱は2本柱と考えるが、P3(SP415)しか確認出来なかった。周壁溝は北・西・東壁沿いに巡る。

出土遺物 (Fig. 8, PL. 10) 弦生土器をはじめ。古墳時代前期初め頃の土師器片が出土している。床面密着のものもある。SC15内出土のものでもSC16の時期と考え

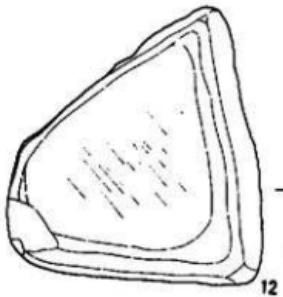


Fig. 7 SC04 出土遺物 (1/3)

SC15

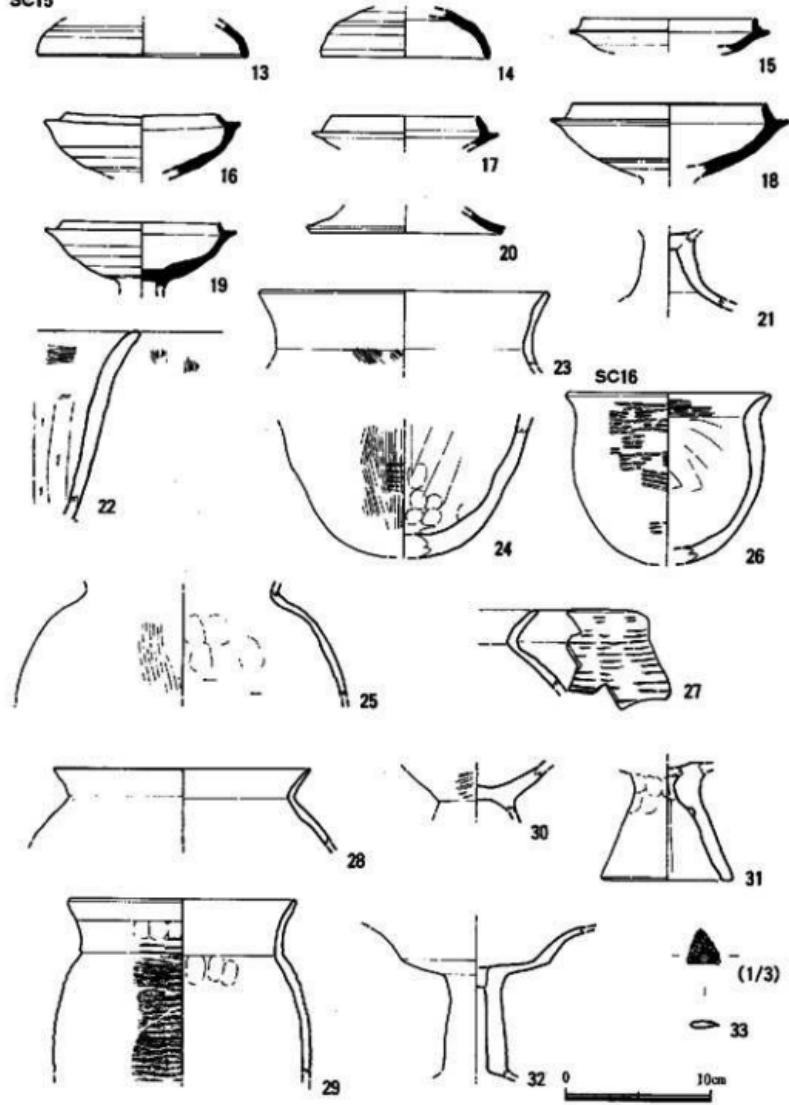


Fig. 8 SC15-16出土遺物(1/3・1/4)

られるものを報告する。

26は小型の鉢1/2片。口縁部は短かくく字状に外反する。復元口径14.0cm器高11.8cmを測る。外面は平行叩き、内面はヘラナデ。口径部内面は刷毛である。色調は橙色から黄橙色で、最大5mmの粗砂粒を多く含む。27~29は甕の口縁部片で、27は小片、28は1/6片で復元口径17.4cm、29は1/4片で復元口径15.5cmを測る。27~29は外面平行叩き、内面は不明だが、29は指おさえ痕が残る。30~32は高环で、30は環脚部片。31は脚部1/2片。で復元

脚径8.1cm、32は環脚部1/2片。色調は30が淡橙色、31が暗赤褐色、32は淡橙色を呈す。胎土は30が3mm内の砂粒を含み、31・32が5mm内の粗砂を多く含む。

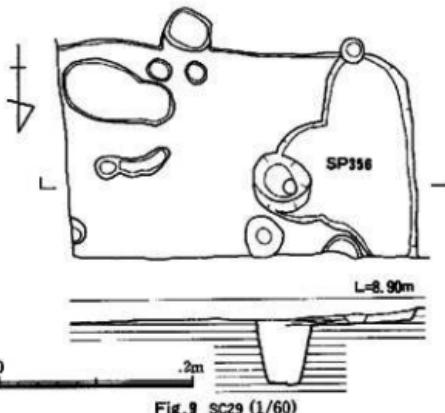


Fig. 9 SC29 (1/60)

SC29 (Fig. 9, PL. 4)

調査区北東隅で検出した方形住居址の一部である。全容は不明だが、東西長3~5m以上、南北長2.35m以上を測る。遺存状況は悪く、壁の残りは2~5cm程である。床面は地山粘土の貼床であったようで固く締まっていた。主柱ははっきりしないが、SP356を主柱の一つとする4本柱主柱と考える。このSP356は直径60cm、深さ66cmとしっかりしている。

出土遺物 土師器・須恵器の細片が少量出土している。

3. 挿立柱建物

SB22 (Fig. 10, PL. 5)

調査区中央で検出した主軸方位をN-4°30'-Wに取る3間×4間の建物で、西側に庇が付く。梁行全長は北側で4.27m、南側で4.35m、桁行全長は西側で5.85m、東側で5.95mを測り、庇部を入れると北側で5.47m、南側で5.45mとなる。床面積は身舎部分で26.02m²、庇部を入れると32.21m²を測る。柱穴は円形又は梢円形で、直徑は45~60cm、深さ15~70cmを測る。四隅の柱は深くしっかりとおり、庇部分の柱穴は身舎部分の柱に比べ浅い。柱径は痕跡から10~20cm位で掘方埴土は黒褐色粘土質土と地山ローム土の混合土で比較的堅く締められた。

出土遺物 弥生土器片と土師器片が大半で、IV期と考えられる須恵器片が1点出土している。

SB23 (Fig. 10, PL. 5)

主軸方位をN-62°30'-Wに取る1間×3間の側柱建物である。梁間全長3.23m・3.25m、

桁行全長6.52m・6.60m、床面積は21.25m²を測る。柱穴は方形又は楕円形で直径40~60cmと比較的大きく、深さも20~50cmを測る。東側の2柱が深さが他の柱穴に比べ浅い事から建物的主要部分は西側の1間×2間の部分からも知れない。柱径は痕跡から10~15cm、掘方埋土は黒褐色粘質土に地山ロームブロックを混えた土である。

出土遺物 各柱穴から弥生土器片が出土しているが、時期的にはわからない。

SB24 (Fig. 11, PL. 5)

調査区西側で検出した主軸方位N-70°-Wに取る1間×2間の建物である。梁間全長2.07m、桁行全長4.06m・3.88m、床面積は8.22m²を測る。柱穴は隅丸方形又は長方形に近い形で、直径も60~120cmと大きく、深さも50cm前後を測る。柱穴は痕跡から15~20cmで、掘方埋土は黒褐色粘質土と褐色の地山ローム上の混合土を主体とし、掘方埋土は固く締まっていた。規模的に見て倉庫であろう。

出土遺物 (Fig. 13, PL. 10) 各柱穴から中期後半頃からの弥生土器片が出土しているが、図示出来るものは少ない。

34~36は弥生土器、34は甕の口縁部1/6片。復元口径26.4cmを測る。く字状に外反する口縁部で内外面磨滅が著しいが、内面はヨコ刷毛のちナデ。35は器台1/2片で、復元脚径12cmを測る。器壁は磨滅するが指おさえ仕上である。36は筒形の器台1/2片で、口径8.0cm、器高9.6cm、底径10.8cmを測る。外面は指おさえ痕が残る。色調は明赤褐色を呈す。37は甕の底部1/2片。復元底径7.8cmを測る。内外面ナデ、外底面に黒斑がある。外面色調はいずれもにぶい橙色、胎土も石英・長石粒を多く含む。34はSPI23掘方、35・36はSPI33掘方、37はSPI08掘方出土。

SB31 (Fig. 11)

調査区東側で検出した主軸方位をN-11°30'-Wに取る2間×3間の建物である。梁行全長3.76m・4.01m、桁行全長5.38m・5.40m、床面積は20.95m²を測る。全体に柱筋はややゆがむ。東側桁側には間柱らしき柱間が半間間隔で入る。柱穴は円形で、直径は30~40cm、深さは20~40cmとなり、比較的浅くしっかりしていい。柱径は痕跡から10cm前後で、堀方埋土は橙色地山ロームブロックを主体とし、黒褐色粘質土を混える土で固く締っている。

出土遺物 各柱穴から弥生土器や土師器・須恵器の細片が少量ずつ出土している。

SB32 (Fig. 11, PL. 5)

主軸方位をN-88°-Eに取る東西方向の2間×2間の側柱建物である。梁行全長3.05m・3.18m、桁行全長4.32m・4.38m、底面積は13.57m²を測る。柱穴は円形又は楕円形で、直径は25~65cm、深さ5~40cmを測り、梁側の間柱は浅く小さい。柱径は痕跡から15cm前後で、堀方埋土は黒褐色粘質土で地山ロームブロックを混入している。

出土遺物 各柱穴から弥生土器らしき土器片が出土しているが、時期を決めうるものはない。

SB33 (Fig. 11, PL. 5)

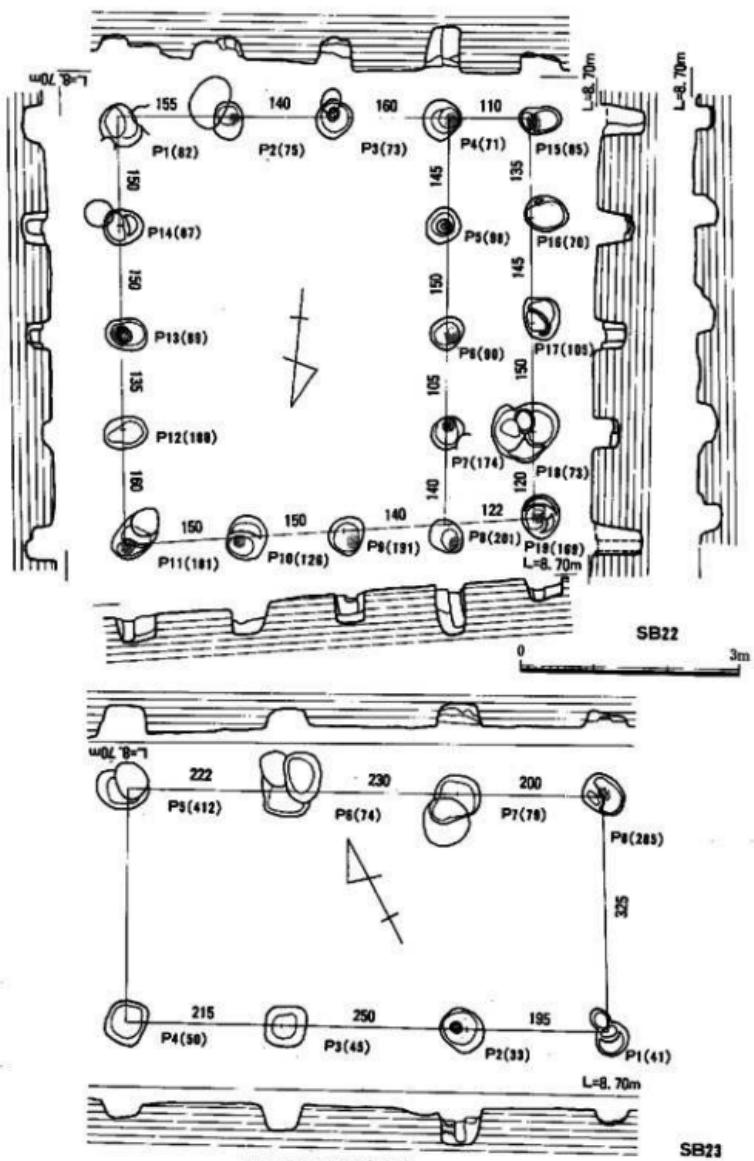


Fig.10 SB22-23(1/80)

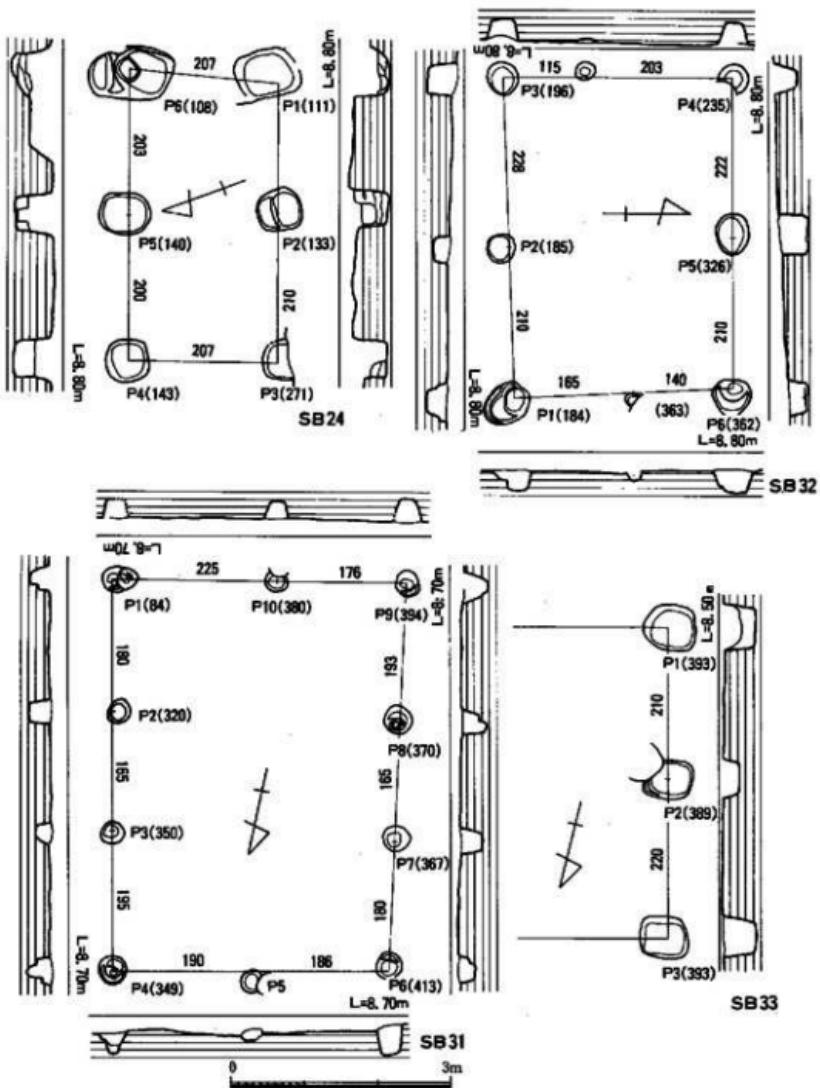


Fig.11 SB24·31~33(1/80)

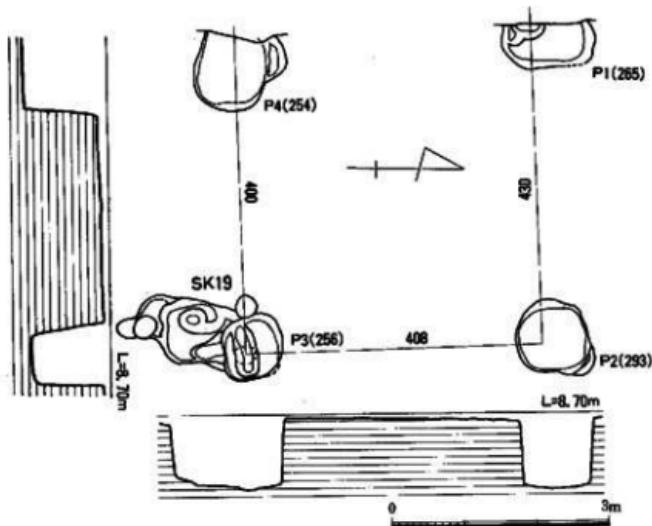


Fig. 12 SB34(1/80)

調査区東側でSD28に切られる建物で全容はわからない。主軸方位はN-13°-Wを取り、SB24と同様に1間×2間の建物の可能性もある。柱間全長は4.30mを測る。柱穴は隅丸長方形で直径が65~75cm、深さ25~45cmを測り、両側の柱穴が深くしっかりしている。掘方埋土は黒褐色が黑色粘質土で橙色地山ロームブロックを混入していた。

出土遺物 (Fig. 13) 各柱穴から弥生土器片が多数出土しているが、図示出来るものは少ない。

38~40は弥生土器の甕。38は底部1/2片。復元底径6.6cmを測る。外面は磨滅が著しいが板ナマ。39は口縁部小片。復元口径は25.2cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。40が口縁部細片。磨滅がひどく調整は不明。色調は38・39が橙色、40が浅橙色、胎土は38は精良、39は石英・長石などの細砂粒を多く含み、雲母片も含む。

SB34 (Fig. 12, PL. 6)

西側境界地にかかり全容はわからないが、大きな柱穴掘方を持つもので、一応掘立柱建物とする。東側柱間全長4.08m、北側全長4.30m、南側全長4.00mを測る。柱穴は隅丸方形又は長方形で、直径は0.9~1.3m、深さは0.9~1mを測る。柱径は痕跡から25~30cmを測るが底よりかなり上の所でとまっていた。掘方埋土は黒褐色粘質土に橙色地山ローム土を多く混入し、

固く締められていた。

出土遺物 (Fig. 13) 各柱穴から弥生土器片などが出土している。

39は弥生土器の甕口縁部細片である。逆L字形の口縁部で、口縁直下に三角突帯が付く。色調は浅橙色で、胎土は石英・長石の細粒を多く含む。

4. 土坑

SK03 (Fig. 14, PL. 6)

調査区南壁にかかる隅丸長方形の土坑。確認規模は長さ2.8m、幅2.7m、深さ0.7mを測る。調査当初 SK03・I3 とし、土層状況から SK13 は SK03 に切られる両側のテラス状の部分としたが、ここでは一連のものと見做し、SK03 として報告する。底面は南側がテラス状を呈し、東側部分が一段深くなる。埋土は黒褐色粘質土を主体とし、ロームブロックを多く含む。SK13 の部分は SK03 の土層に比べ、地山ロームブロックの混入が少ない。

出土遺物 (Fig. 16, PL. 11) 弥生土器から土師器の細片が出土している。須恵器も少量含む。遺物は上層が多い。

40は須恵器の壺蓋2/3片。口径12.2cm、器高4.0cmを測る。天井部は回転ヘラ削りで、その他はナデ。ろくろ回転は時計回り。色調は灰色で、胎土は精良。IVa期のもので上層出土。

SK06 (Fig. 20)

隅丸長方形の土坑。長さ1.40m、幅0.65m、深さは浅く6cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で橙色地山ロームブロックを少量含む。SC15・SK20・SD02・SD11とはほぼ同一方向である。

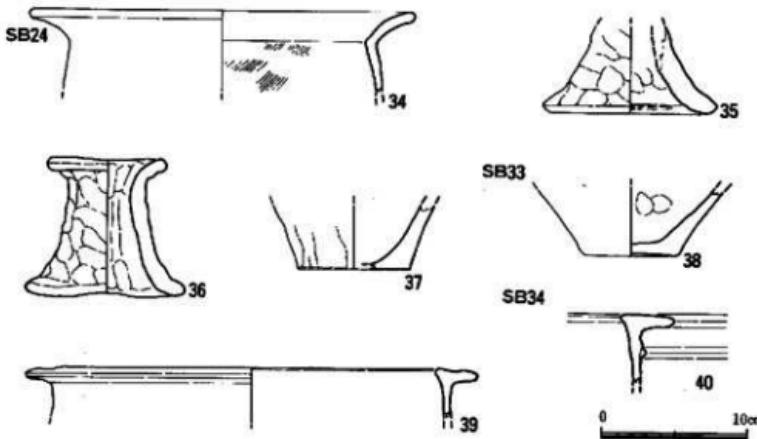


Fig. 13 SB24・33・34出土遺物(1/4)

出土遺物 土師器・須恵器の細片が少量出土している。

SK08

SD01の北側で検出した浅い土坑。SD01と切り合うがその関係はわからず、SD01と一体のものかもしれない。

出土遺物 土師器・須恵器の細片が少量出土している。SD01とまとめて報告する。

SK14 (Fig. 15, PL. 9)

調査区南東隅で検出した円形の土坑。規模は上面で 0.8×0.8 m、底面で 0.85×0.8 m、深さは約1mを測る。底面は平坦で、壁は部分的にオーバーハングしている。上層に土師器・須恵器の破片が分布していた。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物 (Fig. 16, PL. 11) 上層を中心に土師器・須恵器片が出土している。

42・43は須恵器の环身。いずれも1/4片で、口径は復元でいずれも11.4cm、器高は3.8cm、4.0cmを測る。調整は41はナデ、43はナデで外底2/3は回転ヘラ削りで、ヘラ記号がある。色調は41が黒灰色、43が暗青灰色で、胎土はいずれも細砂粒を含む。44は土師器の器台の脚部であろうか。1/4片で復元脚径27.3cmを測る。磨滅が著しいが明瞭に水引痕が残る。外面色調は浅黄橙色で、赤色顔料の痕跡が残る。胎土は径3mm以下の砂粒・赤色粒子を含む。

SK19

示していないが調査区南東側で検出したSB34柱穴SP256と切り合う土坑。埋土は橙色ロームブロックを少量混入する。SB34の柱穴の可能性もある。

出土遺物 弥生土器片を含む土器片が出土している。

45は小型の壺の口縁部小片。復元口径9.6cmを測る。器壁は磨滅が著しいが指おさえ痕が残る。色調は橙色で胎土は精良。径2mm以下の砂粒と赤色粒子を少量含む。

SK20

調査区南側で検出した長方形状の土坑。長さ1.85m、幅0.58m、深さは浅く4cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で地山ロームブロックを混入する。

出土遺物 土師器らしき土器片が1点出土している。

5. 土塙墓

SK17 (Fig. 15, PL. 7)

調査区北側で検出した略南北方向に主軸を取る長方形の土坑。北側一部を排水溝に切られている。規模は長さ1.42m、幅0.82m、深さ22cmを測る。埋土は黒褐色に橙色ローム土を少量含む。副葬品は南隅に刀子を、北側に土師器の环1枚と小皿2枚を床面よりやや上面で検出した。また埋土中から鉄釘が出土しており木棺墓の可能性が強い。

出土遺物 (Fig. 17, PL. 11) 48~50は土師器。48は环1/2片で、復元口径13.4cm、器高2.

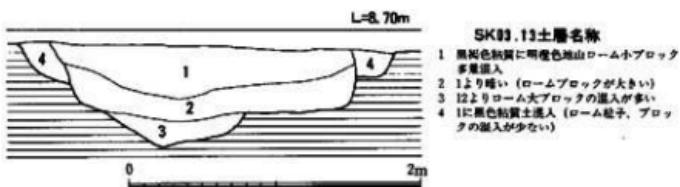
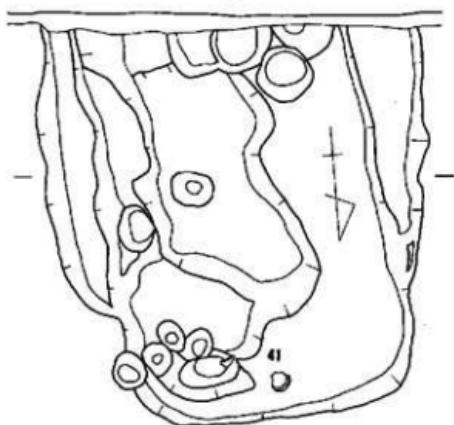


Fig14 SK03(1/48)

7cm、底径9.6cmを測る。磨滅が著しいが外底部に糸切り痕が残る。49・50は皿ではほぼ完形。口径は8.8cm、8.0cm、器高1.2cm、1.1cmを測る。器高は磨滅が著しいが50の外底部には糸切り痕が残る。色調は48がにぶい橙色、49・50が明褐色を呈し、胎土は48が細砂粒を多く含み、49は精良で赤色粒子を少量混入し、50は細砂粒を少量含む。

51～54は鉄製品である。51は錆膨れがひどいが、刀子であろうか。残存長8.0cm、幅0.8～1.1cmを測る。鞘と思われる木質が残っている。52～54は釘。残存長は52が5.3cm、53が3.6cm、54が5.0cmを測る。断面はいずれも方形で直径は0.6～0.8cmを測る。54には棺材と思われる木質が残っている。

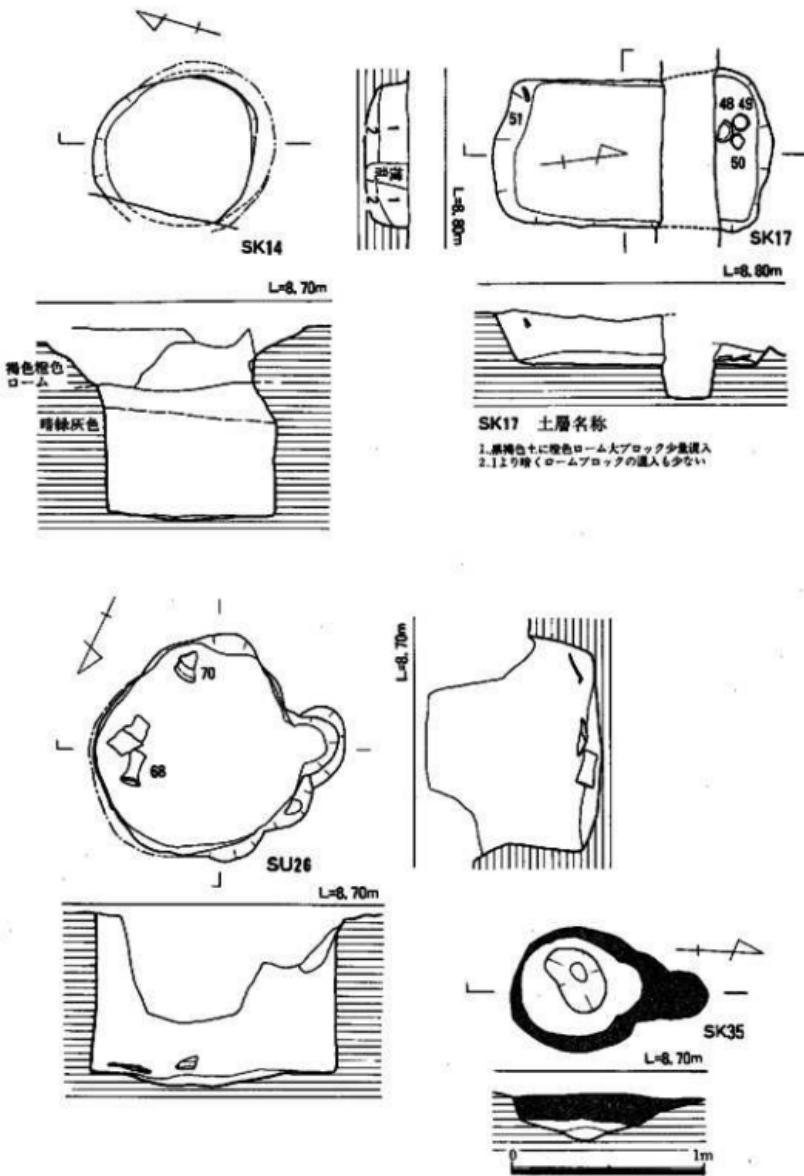


Fig15 SK14・17・35、SU26(1/30)

6. 貯藏穴

SU26 (Fig. 15, PL. 7)

調査区北西隅で検出したもので上面は擾乱を受けている。平面は円形で壁はややオーバーハングする。規模は 1.1×1.1 m、底面で 1.05×1.1 m、深さは中央部で0.9mを測る。また南西側には更に半円のこぶ状に壁を堀り込んでいる。埋土は黒褐色粘質土で地山ローム土を混入する。遺物は上面と下層を中心に完形に近い遺物が出土している。

出土遺物 (Fig. 18・19, PL. 11) 弥生土器片が多量出土している。須恵器片も2点出土するが混入品であろう。

55～57は上層出土。55・56は甕はいずれも口縁部がく字状に外折する中期後半代のもの。55は1/6片で復元口径33.6cmを測る。56は復元完形で、復元口径32.8cm、器高は33.8cmを測る。いずれも磨滅が著しく調整は不明。色調は55・56共赤橙色で胎土は1～4mmの石英・長石粒を多く含み、56は雲母片も含む。57は高环脚部片。全体に磨滅し調整不明。色調は赤褐色で、胎土は石英・長石粒子・赤色粒子をわずかに含む。

58～60は中層出土。58・59は甕口縁部片。58はく字状に外折する口縁部1/6片。復元口径28.2cmを測る。外面刷毛目がかすかに残る。59は1/4片で、復元口径40.5cmを測る。上面が内湾するく字状の口縁部で、口縁直下に三角突帯が一条巡る。色調は58が橙色、59が黄橙色で、胎土は58が2mm以下の砂粒を多く含み、59は5mm以下の砂粒・赤色粒子を多く混入する。60は器台か高環の脚部片。復元脚径33cmを測る。内外面磨滅が著しく調整は不明。外面色調はわずかに

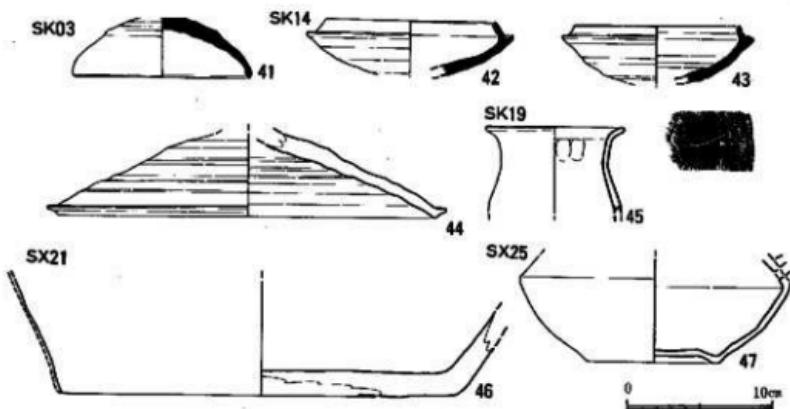


Fig. 16 SK03・14・19, SX21・25 (1/4)

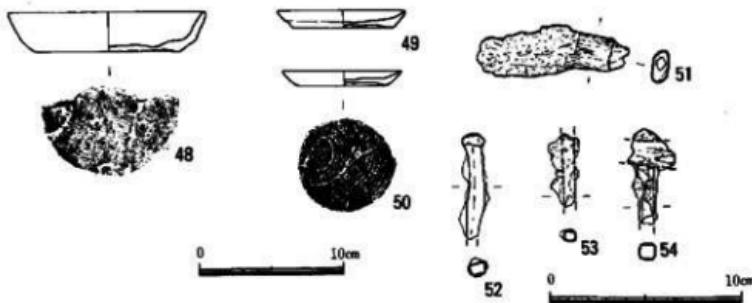


Fig. 17 SK17出土遺物 (1/3-1/4)

赤色顔料痕が残る浅黄橙色で、胎土は緻密で2mm以下の砂粒を多く含む。

61～70は下層及び底面出土。61・62は甕でくの字状に外反する口縁部をもつ。いずれも1/6片で復元口径33.0cm、35.2cmを測る。61は磨滅が著しいが外面はタテ刷毛、62は磨滅がひどく調整は不明。色調はいずれも橙色で、胎土に3mm以下の砂粒と赤色粒子を含む。63は袋状口縁壺の1/6片。復元口径11.8cmを測る。口縁外面はヘラ研磨、頸部はタテ方向のヘラ研磨。内面に指おさえ痕が残る。外面は丹塗り、胎土に径3mm以下の砂粒と赤色粒子を含む。64は壺の底部片か。底径7.8cmを測る。磨滅がひどいが外面は刷毛目が残る。色調は淡橙色で、胎土に1～2mmの砂粒を混入する。65は甕の底部1/2片。復元底径8.8cmを測る。磨滅が著しく調整は不明。色調は明赤褐色で胎土に5mm以下の粗砂粒を多く含む。66～68は筒形の器台である。いずれも器壁は厚めのほぼ同形態のもの。いずれも指おさえ痕が明瞭に残る。66は口径8.8cm、器高15.1cm、67は9.7cm、器高19.2cm、68は8.7cm、器高17.6cmを測る。色調は66・68が橙色、67が浅黄橙色を呈し、胎土がいずれも5～7mm位の粗砂粒を多く含む。69は66～68より器壁が薄くなる。復元脚径11cmを測る。外面色調は橙色で、胎土に3mm以下の砂粒を多く含む。70は丹塗りの高壺部1/6片。復元口径32cmを測る。外面は磨滅が著しい。色調は橙色で、胎土は精良で緻密。焼成は良好。71は上層出土の断面長方形の磨石又は叩石。石質は灰白色のアブライトか。各面擦られている。長さ6.5cm、幅2.6cmを測る。

7. 溝状遺構

SD01 (Fig. 21, PL. 8)

調査区西側で検出した主軸方位をN-18°30'-Wに取る小溝。全長11.7m、幅0.8-1.45m、深さ10～30cmを測り、溝底のレベルは北から南へ深くなる。溝の北側はSK08と切り合うが、その先後関係は不明で埋土もほぼ同じ。埋土は黒褐色粘質上で橙色ロームブロックを混入する

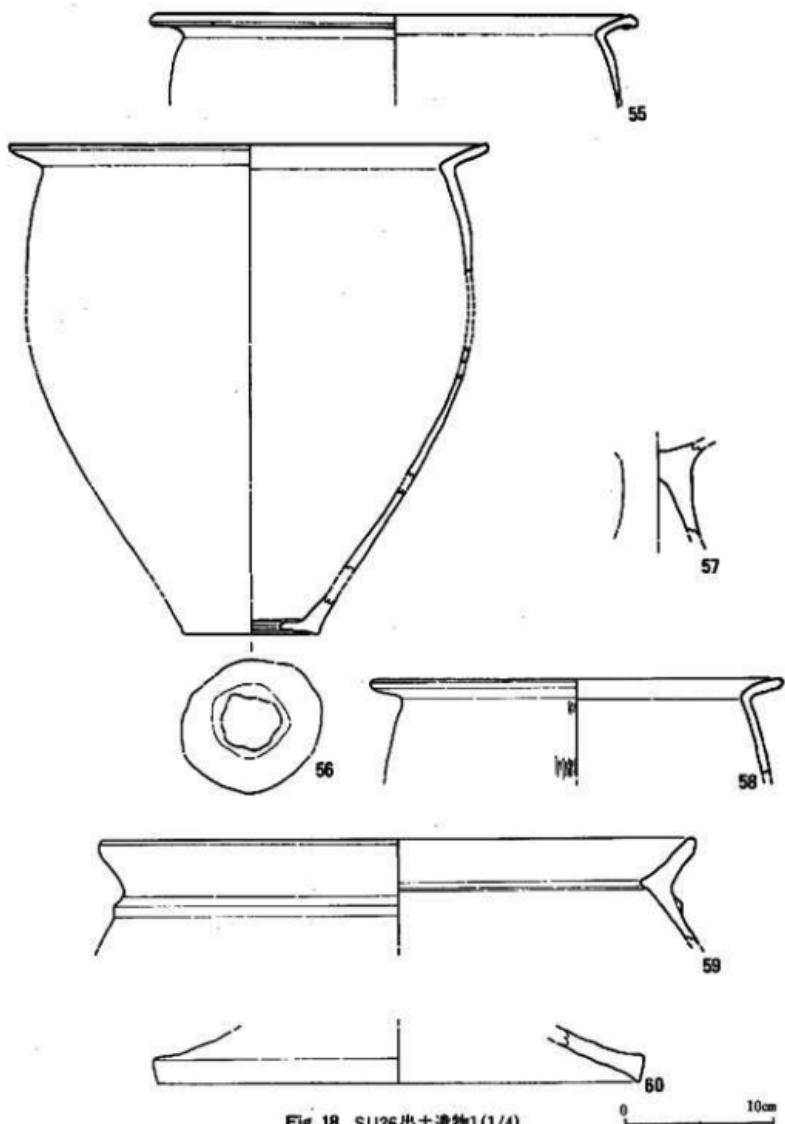


Fig. 18 SU26出土遺物1(1/4)

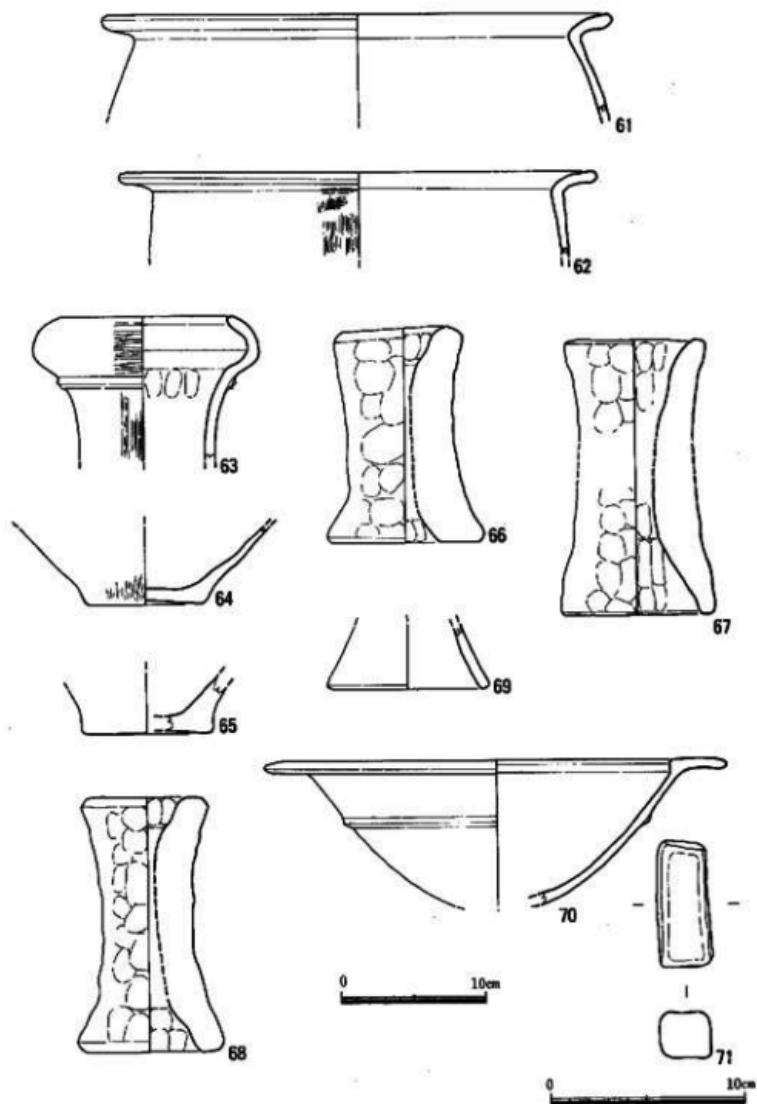


Fig. 19 SU26出土遺物2(1/3・1/4)

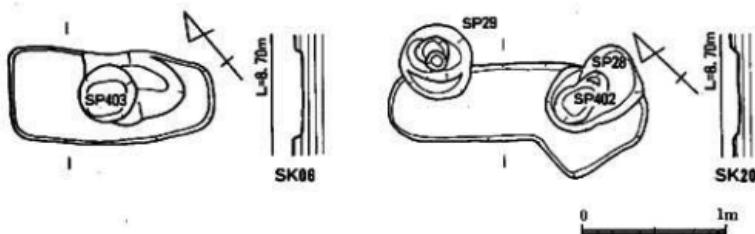


Fig. 20 SK06・20(1/40)

が、下層程橙色ロームブロックの混入が多い。

出土遺物 (Fig. 22, PL. 12) 弥生土器から古墳時代後期の土師器・須恵器が出土している。

72～87は須恵器、72～76は环蓋、74を除いては同様の形態で時期的にはIIIb～IVa期のもの。72は1/4片で復元口径11.6cm。天井部は回転ヘラ削りで、その他はナデ。73は天井部2/3片。天井部は回転ヘラ削り。74は有蓋高环の蓋3/5片で口径は14.8cmを測る。天井部に鉗状の摘みがつく。天井部1/2は回転ヘラ削りで、その他はナデ。75は1/5片で復元口径13.0cmを測る。天井部は回転ヘラ削り、その他はナデ。天井部にはヘラ記号がある。76は小片で復元口径14.0cmを測る。色調は72が暗赤褐色、73・74・76が淡灰色で、74は自然釉がかかり、75は灰色を呈す。胎土はいずれも砂粒を含む。ろくろ回転は72～76迄時計回り。77・78は环身。77は体部小片で内外面ナデ。78は2/5片で、かなり焼きひずみし、復元口径11.6cmを測る。外底部は回転ヘラ削りで、その他はナデ。色調は77が灰色で自然釉がかかり、78が淡灰色を呈す。胎土は細砂を含む。79・80は高环。79は脚部片。4条の浅い凹線が巡り、脚部内面にはしばり痕が残る。80は脚部1/2片。裾部と筒部に2条の沈線が巡る。内外面ナデ。外面色調は79が黒灰色、80が灰色、胎土は79が精良。80が最大3mm程の砂粒を多く含む。81は胴部1/4片。最大胴径11.4cmを測る。外面ヘラ削りのちナデ。色調は灰色で胎土に最大5mmの粗砂粒を含む。82は短頸壺の口縁部小片か。外面上半に櫛描波状文があり、その下に2条の沈線が巡る。色調は灰色で、胎土に細砂を含む。83・84は甕の口縁部片。83は大甕の口縁部小片で、口端部直下には2重の段が付き、頭部外面はナナメのヘラ切り文とその下に2条の凹線が巡る。84は1/3片で復元口径19.0cmを測る。口端部には浅い凹線をなし、内面は當て具痕が残るがナデ消している。色調は83が灰色でうすく自然釉がかかり、84は淡灰色である。胎土はいずれも1～2mmの石英・長石粒を含み、84は焼きがやや甘い。85・86は土師器の甕。85は口縁部1/5片。

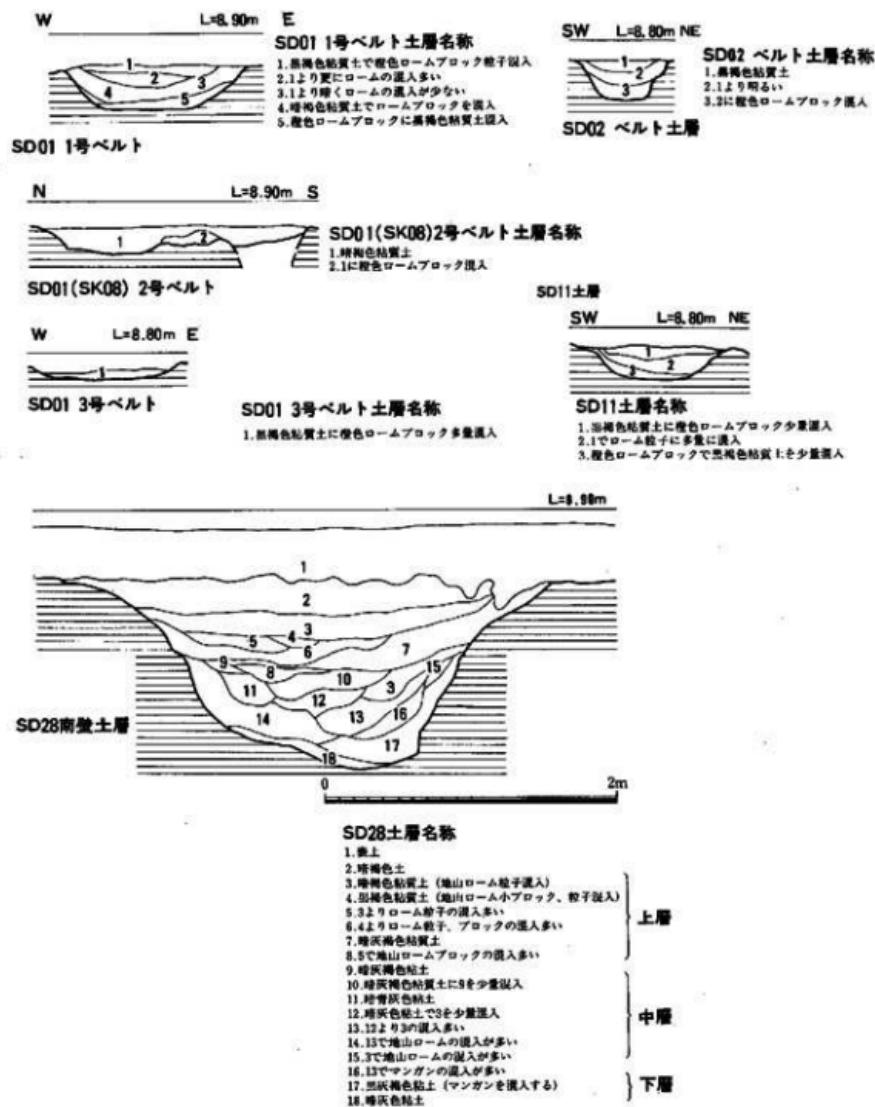


Fig21 SD01・02・11・28土層(1/40)

復元口径19.4cmを測る。口縁部は軽く外反し、口端部にはかるく回線が巡る。磨滅がひどいが内面はヨコナデか。86は1/4片で、復元口径26.0cmを測る。口縁部はわずかに膨み気味に肥厚する。外面はタテとナナメの叩き、内面はタテの叩きがかすかに残る。色調はいずれも橙色で、胎土は最大2mm程の石英・長石粒を含み、85は赤色粒子も含む。88は円盤状石製品である。部分的に欠損するが、直径6.1~6.5cm、厚さ0.9cmを測る。縁辺は面取りされ、表面は部分的に剥落・欠損するが丁寧な削り。色調は青灰色から灰色を呈す滑石製で祭祀遺物か。72・76・82・83は上層。73・75・77・84~86・88は下層出土。74はSK08の部分からであるが一体と見做しこの項で報告した。

SD02 (Fig. 21, PL. 8)

SD01に切られる小溝で主軸方位をN-37°-Wに取り南西から北東方向へ延びる。確認規模は3.6m、幅0.65~0.70m、最大深30cm程を測り、南東側が深くなる。埋土は黒褐色粘質土を主体とするが、下層に橙色ローム大ブロックを混入する。

出土遺物 (Fig. 22) 土師器・須恵器の細片を少量含むが、須恵器は1点と少ない。

87は土師器の甕か壺の底部片。調整は外面に叩きがかすかに残り、色調は明褐色を呈し、胎土に最大3mmの石英・長石粒子を多く含む。

SD09

北西隅SD05東側で検出した長精円の葉巻状を呈し浅く落ち窪む小溝。確認規模は3.65m、最大幅1.15mを測る。埋土は黒褐色粘質土を主体とし、下の方に橙色ロームブロックを混入する。SC05の項で述べたが、SC05のベッド状遺溝の一部かも知れない。

出土遺物 古墳時代の土師器片と須恵器片が少量出土しているが、量的には土師器が多い。

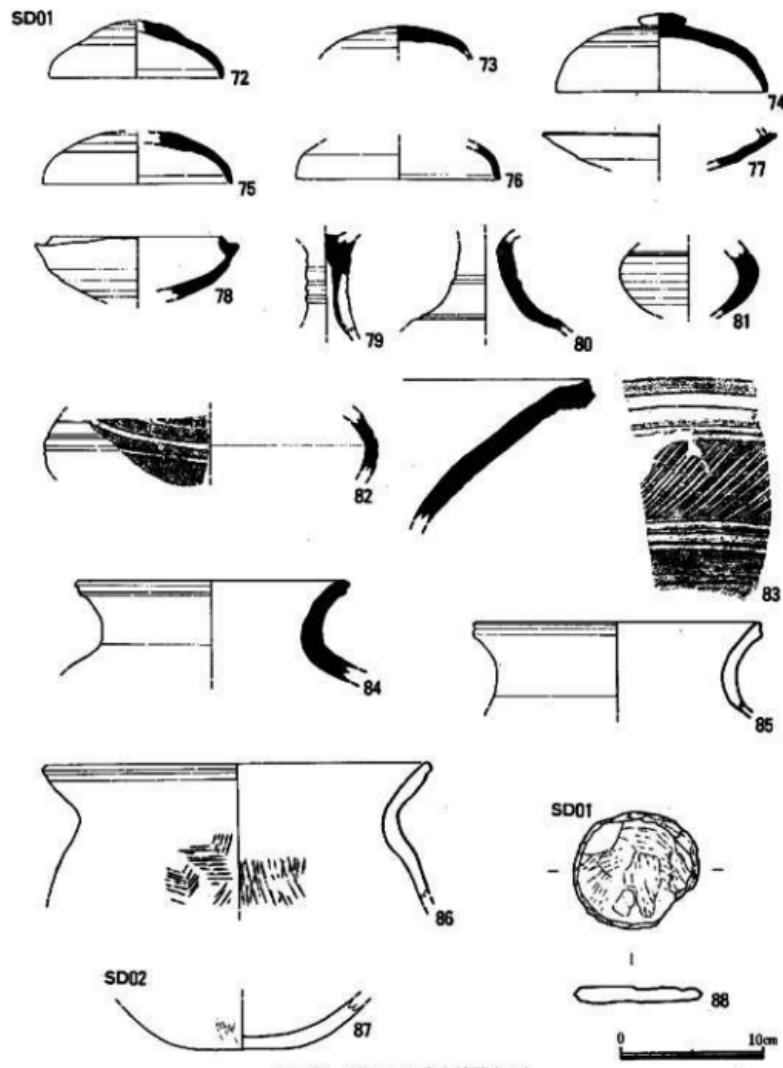
SD11 (Fig. 21)

調査区西境界地で検出したSD02とは同一方向の小溝。確認全長は1.9m、最大幅1.2m、最大深25cm程を測る。溝断面は浅い逆台形で、埋土は黒褐色粘質土に橙色ローム粒子を含むが、下層は橙色地山ロームブロックに黒褐色粘質土を混入する。

出土遺物 弥生土器から古墳時代の土師器・須恵器・赤焼け土器の細片が少量出土している。量的には土師器片が多いが図示出来るものはない。

SD28 (Fig. 21, PL. 8)

調査区東側境界地で検出した主軸方位をN-6°30'-Eに取る溝状遺溝である。調査区内での確認規模は長さ20m、幅2.9m~3.1m、深さは西側造構面から1.3~1.4mを測り、黄白色の八女粘土層迄掘り下げている。溝底のレベルとしては南側が高く北側が低くなっている。溝の断面は逆台形を呈すが壁面は崩落したのか丸味を持つ。埋土は暗褐色粘質土系の土を主体とするが、上・中・下層に大きく分かれる。南壁上層を例にとれば上層は2~12層迄、中層は13~



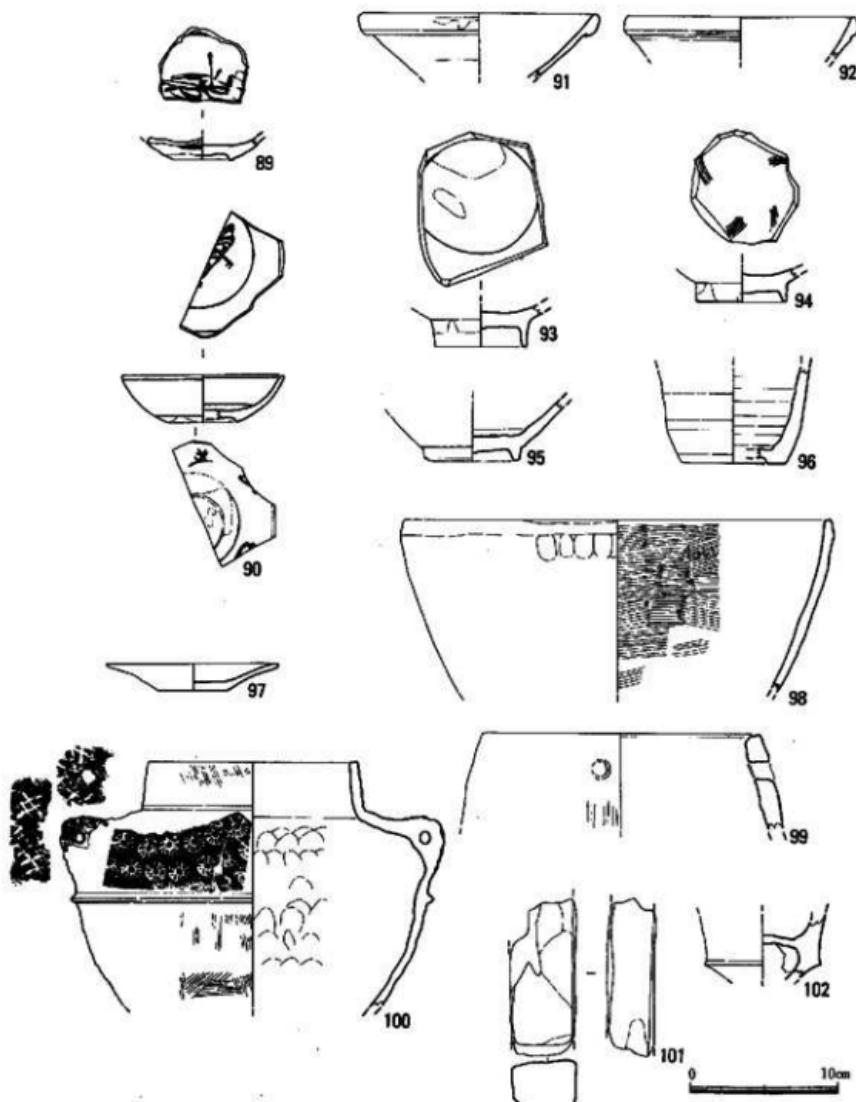


Fig. 23 SD28出土遺物1(1/4)

16層。下層は17・18層で、中・下層は粘性が強く灰味を帯びる。溝底は凹凸が激しいが、堆積層に砂層を含まず、恒常的な水の流れはなかったと思われる。どちらかと言えば排水機能も備えた空堀であろう。

出土遺物 (Fig. 23・24, PL. 12・13) 弥生土器から古墳時代の土師器・須恵器、中世の土師器・瓦質土器・瓦器・青磁・白磁・青花磁器・陶器・瓦などが多く出土している。遺物は上層が最も多く、下層からの出土は少ない。

89・90は明の青花である。いずれも基筒底の皿。89は底部片で底径4.0cmを測る。白化粧をかけた後、呉須で吉祥文様を描き、黄味がかった乳白色釉がかかるが、焼きは甘く、釉の発色は余り良くない。90は1/3片で復元口径11cm、器高3.3cmを測る。内外透明の明オリーブ釉がかかるが、外底部は露胎。見込みと体外面に呉須で文様が入る。胎土は灰白色で細砂粒を含む。91~95は白磁碗。91・92は玉縁口縁である。91は1/3片、92は1/3片で復元口径は16.0cm、15.6cmを測る。いずれも黄味がかった透明釉が厚目にかかり、胎土は91は灰白色で細砂を含み、92が灰白色で緻密で黑色粒子を含む。93・94は高い高台が付く底部片。高台径は93・94いずれも6.2cmで高台内は露胎。他は半透明の白色釉がかかる。94は見込みに梅描文が入る。胎土は灰白色で黑色粒子を含む。95も底部片で、高台径6.5cmを測る。高台部は露胎で、見込みは蛇の目状に釉をかき取る。胎土は灰色で緻密。明オリーブ灰色釉がかかる。96は施釉陶器の瓶と思われる底部1/4片で、復元底径7.2cmを測る。底部は蛇の目高台状の上げ底。外底部は削りで内底面に砂粒が付着する。薄い緑灰色の灰釉がかかる。胎土に黑色粒子を含む。

97は大内系の土師器の皿1/2片。復元口径11.6cm、器高1.6cmを測る。磨滅がひどいが外底部は回転糸切り。色調は淡白橙色で、胎土は細砂粒と赤色粒子・金雲母を含む。98は土師質土器の鍋1/8片で、復元口径29.5cmを測る。内面ヨコ刷毛、外面は煤が付着し、指おさえ痕が残る。99は土師器で器種不明だが、無類壺のようなものか。小片で復元底径19cmを測る。磨滅が著しいが外面細かい刷毛が残る。口縁直下に直径1.2cmの凹孔がある。外面色調は黄橙色で、胎土に5mm以下の粗砂粒を多く含む。100は瓦質土器の湯釜1/2片。復元口径14.2cmを測る。肩部には一対の耳が付き、その表面には櫛状工具による刻目が付き、肩部には更に2段の連続する菊花スタンプが全周する。耳の下には一条の小さな鉗状の突起が巡る。外面には下半部を中心に煤がひどく付着し、内面は指おさえ痕が明瞭に残る。外面色調は淡灰白色、胎土は精良。101も瓦質土器の支脚片。残存長10.6cm、断面長方形4.5×3.2cmを測る。外面は火力を受けたのか黒変している。色調は淡黄色で、胎土は3mm以下の砂粒を多く含む。102は須恵質の环の底部1/3片か。失敗品なのか火膨れが著しい。外面色調は灰色で胎土に細砂粒と黑色粒子を含む。中世の時期の所産か。

103は須恵質の丸瓦小片。内面細かい布目痕が残る。色調は黒っぽい灰色で、胎土は直径2~3mmの砂粒を多く含む。104は粘板岩製の碗小片。オリーブ灰色を呈し、両面を碗として使

用している。残存長8.3cm、厚さ0.6cmを測る。105は滑石製石鍋の細片で復元口径30.5cm位である。外面はノミ状工具痕が残る。106は板状の砥石。断面長方形で、全長12.1cm、幅7.3cm、厚さ2.9cmを測る。上下両面に使用する磨滅痕と敲打調整痕が残る。

89・100・102・104・105は上層、91～96、98・99・101・103は中層、97は下層出土である。

8. その他の遺構

焼土坑SK35 (Fig. 15)

瓢形を呈す上坑で、長径1.0m、短径0.65m、深さは中央部の一段窪んだところで25cmを測る。底面は中央部に向て深くなり、ピット状を呈している。周壁上半部は焼けているが、その焼け具合は弱い。埋土は暗褐色土で焼土ブロックを混入する。

防空壕 SX30 (Fig. 27, PL9)

調査区北東側で検出した長楕円形を呈す長さ4.4m、幅は1.2m、深さ1.1mを測るもの。南側が入口部で階段が掘り込まれている。埋土中から近代の遺物が出土している。

SP335 (Fig. 25, PL. 9・13)

SC04北側、西壁境界地で検出したピット。円形で直径30cm、深さ57cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。弥生土器の108・109が上層に流れ込んだような状況で出土している。

107～109は弥生時代期の上器。107は壺口縁部1/10片。復元口径34.4cmを測る。器壁は磨滅がひどく調整不明。108は筒状の器台ではば完形。口径9.5cm、器高13.9cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。109は鉢で口径10.7cm、器高5.9cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。色調は107

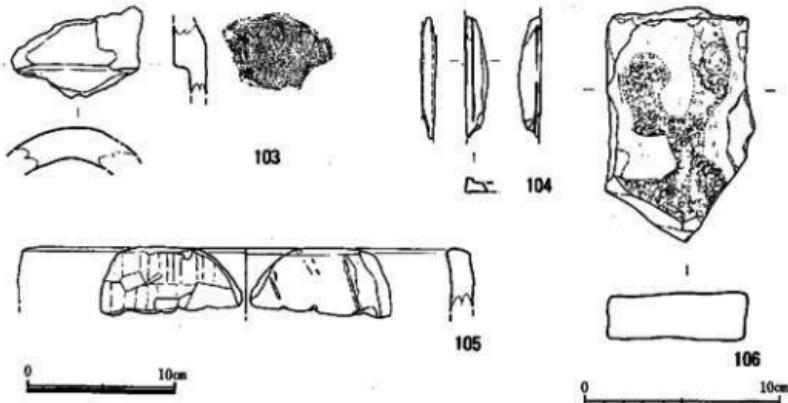


Fig. 24 SD28出土遺物2 (1/3 - 1/4)

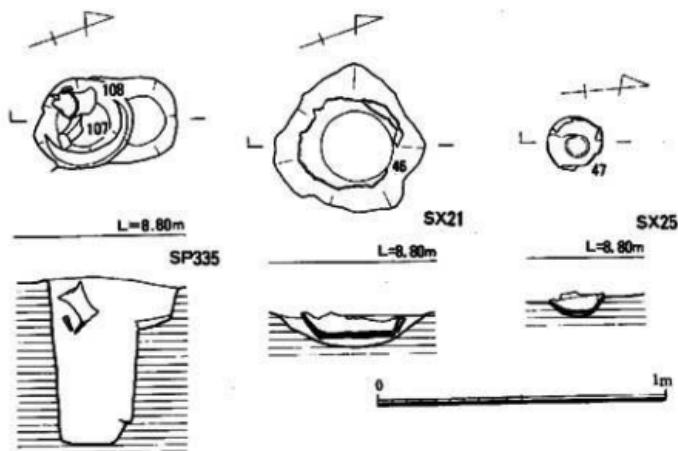


Fig. 25 SX21・25、SP335(1/20)

が黄橙色、108が橙色、109がくすんだ橙色。胎土は107・109が細砂粒を多く含み、108が5mm以下の砂粒を多く含む。

SX21 (Fig. 25, PL. 8)

近代の埋甕46で底部しか残っていない。瓦質の素焼きの甕である。便所遺構の甕であろうか。

SX25 (Fig. 25, PL. 11)

これも近世後半代から近代のもの。日常雑器の陶器の土瓶47を用いたもので、後産処理用の施衣壺であろうか。47は外表面がかかり橙色を呈し、煤が付着している。

9. ピット及び攪乱・遺構面出土遺物

(Fig. 28~30, PL. 13)

番号を付し遺物を取り上げたピットは431個あるが、その埋土は大きく黒褐色・黒色のもの、暗褐色土・褐色土・暗灰褐色土の4種類に大別出来る。黒色・黒褐色のものは古く、褐色、暗灰褐色のものは比較的新しい。

110はSP04出土。須恵器の环身1/4片。復元口径11.2cm、推定器高3.5cmを測る。外面色調は灰色でIVa期のもの。111はSP11出土。环部小片で復元口径10.4cmを測る。受部下にヘラ記号が入る。色調は黒灰色を呈し、IVa期のもの。112はSP19指方出土。环蓋1/4片で、復元口径10.

8cm、推定器高4.1cmを測る。

天井部はヘラ削り、その他はナデ。色調は暗灰色を呈す。III期のものか。113はSP21出土。环身口縁部細片。色調は暗青灰色でIV期のもの。114はSP28出土。弥生中期中頃の甕で逆し字形を呈す口縁部1/8片。復元口径27.0cmを測る。色調は橙色。115はSP60出土。

弥生中期後半の甕の口縁部小片。復元口径は39.4cm。

調整はナデ。色調は橙色である。116はSP91掘方出土。土師器の鉢口縁部1/4片で、復元口径15.0cmを測る。丸味を持った胸部から湾曲して大きく外反する口縁部で、器壁は磨滅がひどく調整不明。色調は明赤褐色を呈す。117はSP94出土。須恵器の環1/10片。高台付で8世紀前半代のもの。色調は灰白色を呈す。118はSP125出土の弥生中期中頃の甕口縁部1/6片。復元口径29.6cmを測る。色調は橙色。119はSP144出土。小型の鉢2/3片で、口径8.3cm、器高5.4cmを測る。指おさえ仕上で形はひずむ。色調は黄褐色を呈す。120はSP145掘方出土。弥生中期中頃の鋤先状口縁を持つ甕1/10片。色調はくすんだ橙色を呈す。121はSP151出土。弥生土器の甕で鋤先状口縁の1/6片。復元口径23.4cmを測る。外面色調は暗灰色を呈す。122はSP203掘方出土。弥生土器の甕口縁部1/6片。復元口径26.6cmを測る。外面色調は橙色を呈す。123はSP243出土。弥生土器の甕口縁部1/10片。復元口径25.6cmを測る。く字状を呈す口縁部である。色調は橙色。124はSP245出土。弥生土器の壺口縁部1/6片で、復元口径16.0cmを測る。口縁部外面に刷毛が残る。色調は明黄橙色を呈す。後期前半か。125はSP254出土。土師器の高环脚部片。磨滅が著しいが、内面に刷毛目が残る。外面色調は淡橙色、5世紀前半のもの。126はSP315出土。台付鉢の脚部1/3片。端部は欠失する。磨滅が著しいが内外指おさえ痕が残る。色調は淡黄橙色を呈す。127はSP397出土。須恵器の環蓋1/5片で復元口径15.0cmを測る。天井部は回転ヘラ削りでその他はナデ。外面色調は暗灰色。IVa期か。128はSP406出土。土師器の灯明皿。口径6.3cmを測る。口縁部に模が付き、底部は糸切り。色調は淡橙色で、胎土・焼成は良い。129はSP421出土。弥生土器の器台底部小片。鉢の可能性もあるが、端部の形態から器台とする。底径は19.4cm位か。外面色調は橙色。130・131はSP426出土。土師器の甕口縁部と底部片。同一個体であろう。口縁部は1/4片で復元口径16.8cmを測る。外面叩き、内面は刷毛。色調は

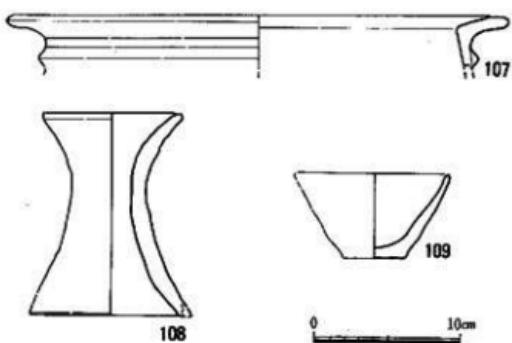


Fig.26 SP335出土遺物(1/4)

橙色。I32はSP432出土。須恵器の环蓋小片。復元口径11.2cmを測る。色調は淡灰色。

I33～I36はピット出土石器。I33はSP29出土。石庖丁の破片で、残存長4.0cm、最大幅3.9cm、厚さ0.6cmを測る。石質は灰色の凝灰岩質ホルンフェルス。I34はSP60出土。支脚状の不明石製品。色調は二次加熱を受けたようでくすんだ黄白色を呈し、石質は砂岩か。全長10.2cm、幅5.0cmを測る。I35はSP149出土の滑石製凹盤状石製品。部分的に欠損するが直径6.2～6.3cm、厚さ1.0cmを測る。色調は銀灰色を呈す。同様のものはSD01出土の87がある。I36はSP338底から出土した叩石。石質は玄武岩で大型蛤刀石斧の欠損品を再利用したものか。側辺には敲打調整痕が残る。全長7.6cm、最大幅5.5cmを測る。色調は灰黄色である。

擾乱・造構面出土遺物 (Fig. 30)

I36はSX10出土の須恵器の胴部1/3片。復元口径8.2cmを測る。外面横目とかき目状の沈線が巡る。I37は表土出土。須恵器の高环2/5片。復元口径12.2cmを測る。色調は淡灰色である。I38は表土出土の土師器皿。口縁部径7.6cm、器高1.5cmを測る。内面に鶴・亀・松梅などの文様が型押しされる。焼成は良い。

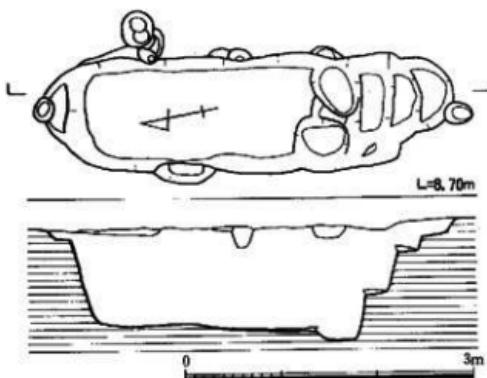


Fig. 27 SX30(1/60)

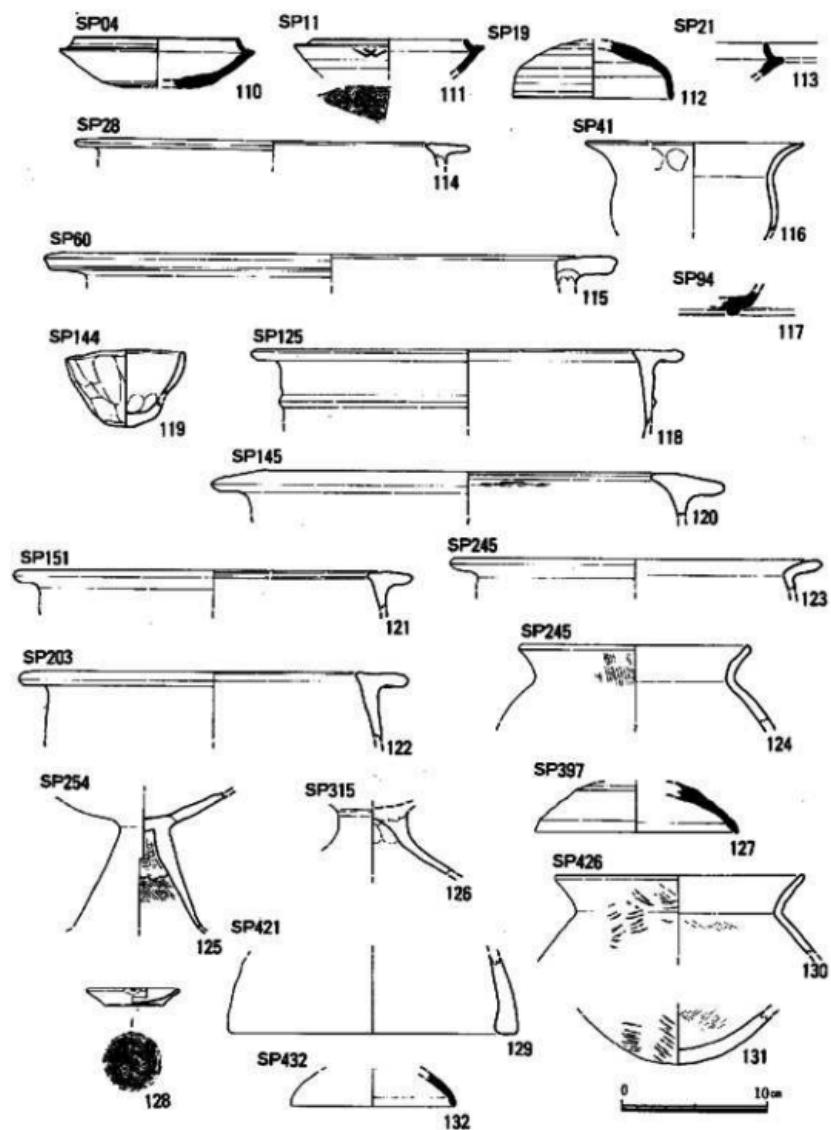


Fig. 28 ピット出土遺物1(1/4)

IV まとめ

比較的狭い調査範囲であったが、得られた成果は大きかったと言える。ここでは時代毎に各遺構の整理を行い、若干の補足を加えて、不充分ではあるがまとめとしたい。

今回の調査で検出した遺構の時期は弥生時代中期末から中世末戦国時代の16世紀迄の時期である。

弥生時代は貯蔵穴SU26が最も古く、時期としては中期末頃で、貯蔵穴としては最終段階のものである。この時期を境に食料の貯蔵方法が高床倉庫へと完全に転換していくのであろう。また掘立柱建物SB24も柱穴掘方内から弥生土器などしか出土しておらず、岡化出来る遺物などから後期と考える。SB23、33も建物プランが同様の形態であり、弥生時代の可能性が強い。SC04は全掘していないので不正確ではあるが、床面から中期中頃位の遺物が出土している。またSC05は屋内土坑SK18出土の遺物が、常松幹雄編年による第V期に相当し、弥生時代終末期位に推定出来る。

古墳時代はSCI2・15・16、SK03・17、SD01・02などがある。SCI2・16は叩きを持った甕の形態などから見て希留式上器の古段階に相当するだろう。SCI5は検出した住居址の中では最も新しい時期で、須恵器の形態は小田富士雄氏の須恵器編年によるIII b 期に推定でき、6世紀後半代であろう。この時期の遺構は他にSK03・14、SD01などがあり、SK03、SD01についてはやや新しくIV a 期6世紀末位迄の時期であろう。掘立柱建物SB22・31・32などはSD01と長軸方向がほぼ近く、同時期の可能性がある。

中世の遺構はSK17、SD28がある。SK17内は釘などの出土から木棺墓であり、土師器の环皿、刀子が副葬されていた。副葬の环の法量は太宰府史跡のSK1085からSK601出土のものに

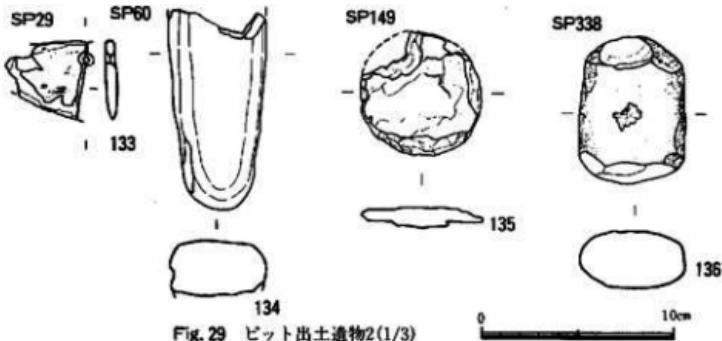


Fig. 29 ピット出土遺物2(1/3)

近く、小皿が SK1204 から SK830あたりの法量の範囲に求められ、両者の法量の範囲から SK1085、SK601あたりの時期と考え、13世紀前半あたりに推定する。同様の中世墓は那珂遺跡群内では第13次、第44次調査などで検出されており、それぞれ中国産輸入磁器や、鉄製小刀、土器器皿などが副葬されている。在地の有力名主層の墓であろう。

・最後に南北方向に延びる大溝 SD28である。

普段灌水した形跡がなく空堀である。埋土中

から出土した明代の青花磁器などから16世紀後半に埋没したと考えられる。15~16世紀時代の溝は他に第7次・第20次・第44次調査区で確認されているが、それらよりは遺存状況の程度差もあるが規模は大きい。当地は対明、対朝貿易の拠点であった博多に近い土地柄、15~16世紀は博多支配を巡って大内・大友などの有力大名が領をけずったが、SD28はそういう社会背景から掘開された防御用の空堀であろう。また那珂の地には山浦氏という在地領主があり、それとどう関連づけらいくのか今後の検討課題であろう。

註

- 註1 「太宰府条坊跡II」 太宰府教育委員会 1983
- 註2 「那珂2」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第222集 1990
- 註3 平成5年度調査、現在観意整理中
- 註4 「那珂遺跡8」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第324集 1993

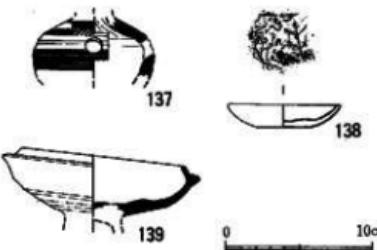


Fig. 30 遺構面、表土出土遺物(1/4)

図 版
PLATES



(1) 調査区全景(北から)



(2) 調査区反転後全景(北から)

PL. 2



(1) SC05(東から)



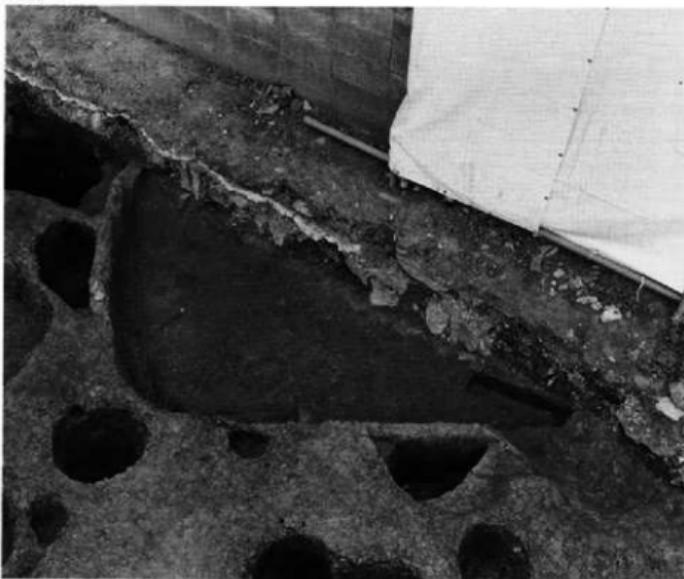
(2) SC04(東から)



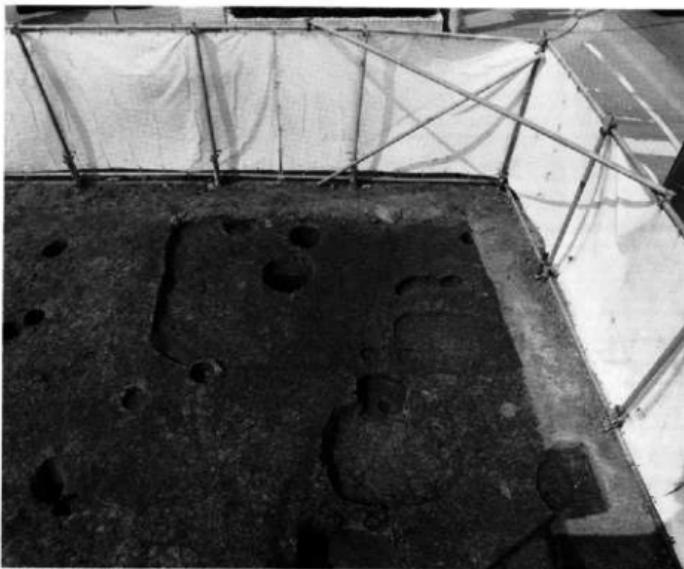
(1) SC15・16(北東から)



(2) SC15・16完掘後(北西から)



(1) SC12(北東から)



(2) SC29(南から)



(1) SB22-24(北から)



(2) SB31・23・24(北から)



(1) SB34(南東から)



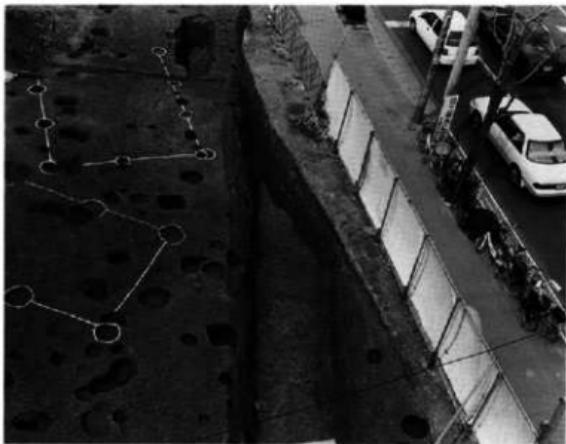
(2) SK03(北から)



(1) SK17(東から)



(2) SU26(西から)



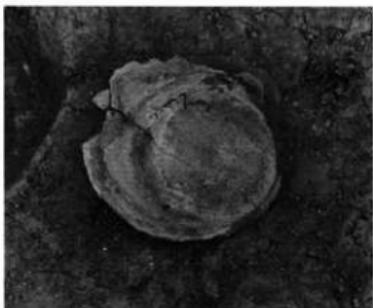
(1)SD28(南から)



(2)SD28土層(北から)



(3)SD01・02(北から)



(4)SX21(東から)



(1) SK14(東から)



(2) SP335(北東から)



(3) SX30(北から)

SC05



3



6



7



8

SC12



9

SC04



12

SC15



16



18



19



22

SC16



24



26

SC15



33

SC12



11

SB24



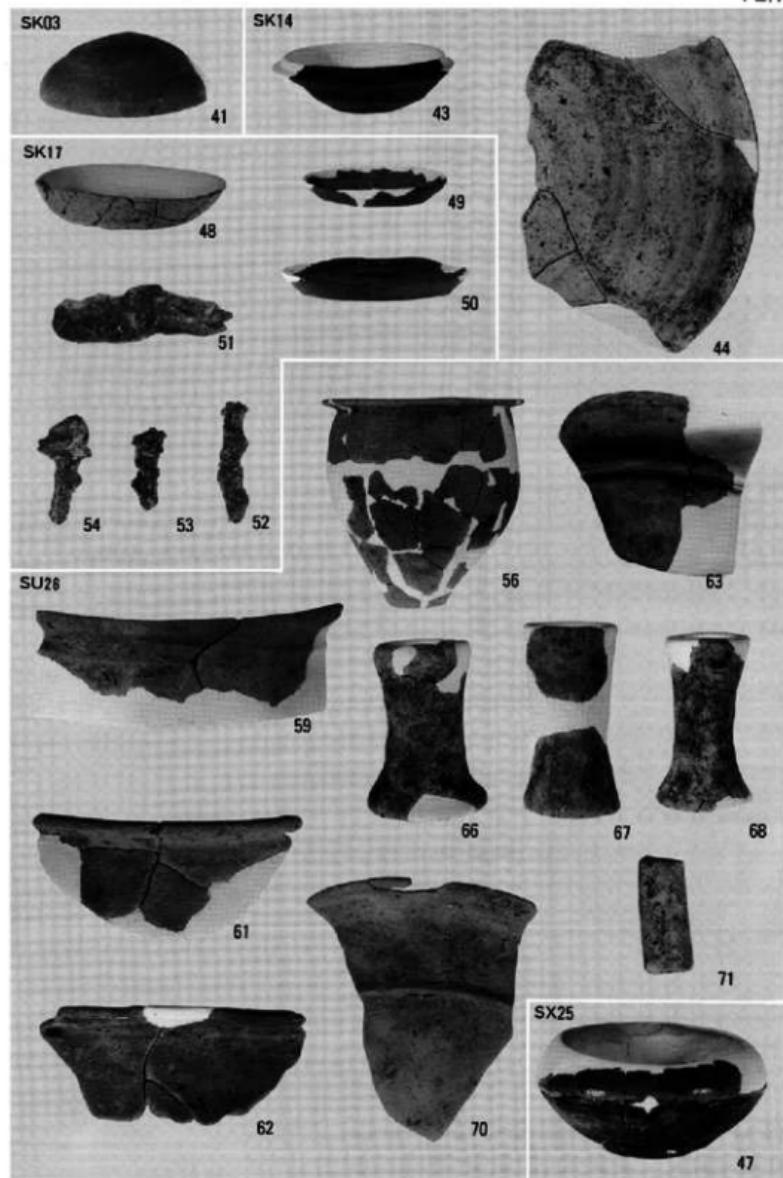
31



35



36



SK03·14·17·26、SX25出土遺物

SD01



74



79



80



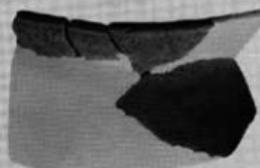
78



83



85



86



88



84

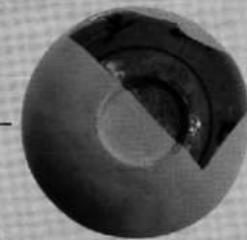
SD28



89



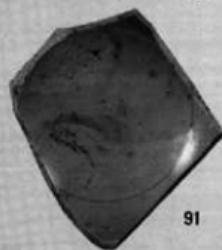
90



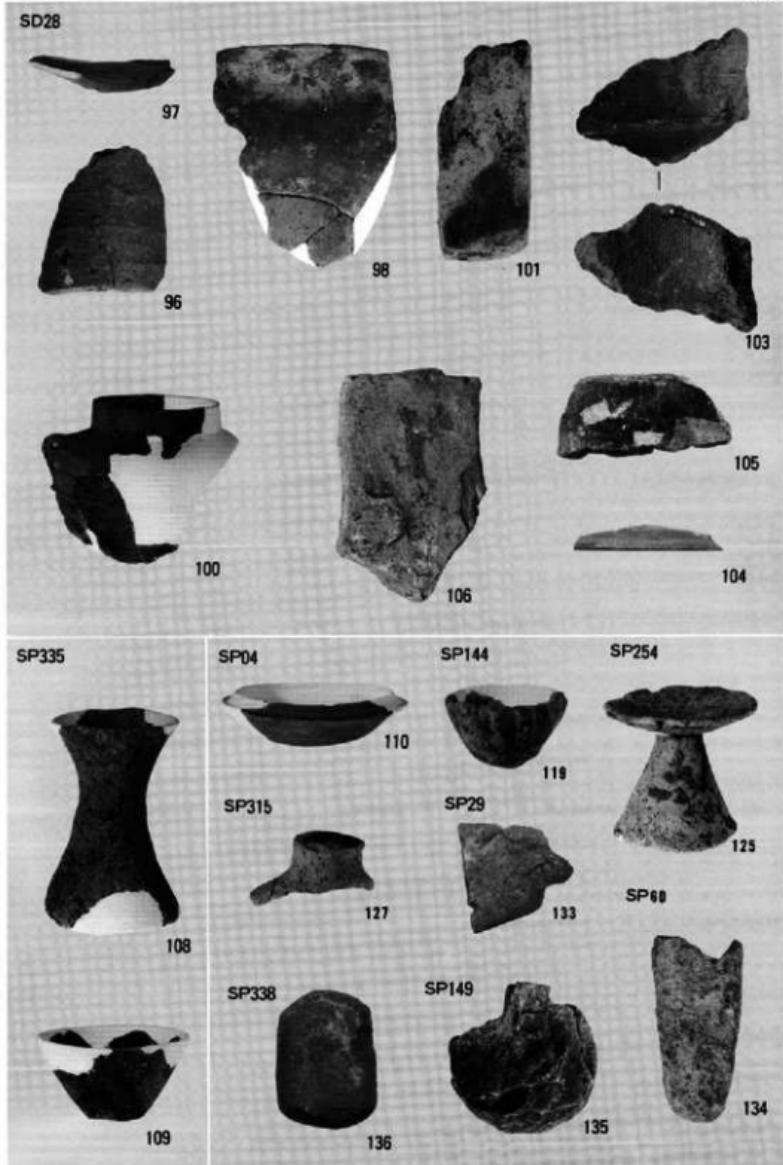
91



92



94



SD28. ピット出土遺物

那珂遺跡12

—那珂遺跡群第40次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第367集

1994年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社 ミドリ印刷

福岡市博多区西月隈4丁目122-4
